
右肩の蝶

るりはりひすい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

右肩の蝶

【Nコード】

N4578J

【作者名】

るりはりひすい

【あらすじ】

世紀の歌姫『鏡音リン』と売れないDJ『鏡音レン』。離れて暮らす二人には、誰にも言えないヒミツがあった。

それが『右肩の蝶』。

二人を繋ぐ絆の証。

異なる世界が二人を引き離し、逢えない切なさに心が震える。

そんな二人に、それぞれの環境で二人を取り囲む様々な人々たちの思惑が交錯する。

紫色をした美しい蝶は、二人を再び結びつける事が出来るのか？

原曲『右肩の蝶』 作詞 水野悠良 作編曲 のりP 唄 鏡音
リン(リン版) <http://www.nicovideo.jp/watch/sm6609407> 鏡音レン(レン版) <http://www.nicovideo.jp/watch/sm6928368>

プロローグ1 レン（前書き）

本作品は、音楽作品『右肩の蝶』を元に、筆者が制作した二次制作のオリジナルストーリーです。

従いまして、原曲の製作者様とは全く無関係です。

また、作品中一部にCP表現や流血、暴力等の描写があります。

ご不快に思われる方は閲覧をご遠慮頂きます様お願い申し上げます。

なお、本作品は、ピアプロ・キャラクター・ライセンス（PCL、<http://piaapro.jp/license/pcl>）に基づいて、クリプトン・フューチャー・メディア株式会社のキャラクター『鏡音リン』『鏡音レン』『KAITO』『MEIKO』『巡音ルカ』『初音ミク』と株式会社インターネットのキャラクター『神威がくぽ』を描いたものです。

本来のキャラクターとは全く異なった表現になっておりますので、そういった表現がご不快な方は閲覧をご遠慮頂きますよう、重ねてお願い申し上げます。

プロローグ1 レン

十四歳の時、アイツに出会った。

アイツは、俺が通っていた音楽スクールに、途中から入学してきた女の子だった。

普段なかなか途中入校を認めないこのスクールに於いて、アイツのような存在はとても珍しい。アイツの事は、直ぐに在校生の話題の中心になった。

とんでもない才能の持ち主とか、反則的に歌が上手いとか、噂先行だった当時のアイツについて、正直俺はあまり関心が無かった。それより自分の成績の方が心配だったからだ。

落ちこぼれ、と言うほどではないにせよ、確かに俺の成績は決して良い方ではなく、いつも担当の先生が頭を抱えていた。

そんなある日、俺が専攻している講座にアイツがやってきた。いつものように教室に一番に入って準備をしていた俺は、入ってきたアイツを見て、そのあまりの可愛さに凍り付いてしまった。

長い睫。大きな碧い瞳。形の良い魅力的な桜色のくちびる。眩いばかりのプラチナブロンド。そして透けるように白い肌。

人形のように整った顔立ちといい、屈託の無い眩しい笑顔といい、まるで天使そのものようだった。

呆然と見とれていた俺の隣に腰を下ろし、話しかけてきたアイツ。「ここ、いいかな？」

何も言えずに、真っ赤になってただ頷く俺。俺はひと目で好きになった。

雷が落ちたとか、そういう感じだろうか。アイツをひと目見て以来、まるで初めから決まっていた運命のように、俺は恋に落ちた。でも。

直ぐには告白出来なくて、しばらくは遠くから眺めている日が続いた。

その間にも、アイツに告白する男子は沢山いたが、みんな玉砕していた。

きつと誰か好きな子がいるに違いない。みんなはそう噂していた。やがて、同じコースの同じ練習生ということもあって、話す機会も少しずつ増えていった。少しずつ一緒にいる時間が増えていき、そのうちいつも一緒に行動をするようになった。

その頃になると、俺の勘違いで無ければ、アイツもこちらをチラチラ見るようになっていた。時々、頬を桜色に染めていることもあった。

最初はただの友達だった。

確かに俺は、アイツのことが好きだった。

でも、告白なんかして今の関係を壊したくない。ヘタレと言いたけりゃ言う方がいいさ。俺は怖かったんだ。

そんなある日。

アイツから呼び出された。

スクールの講座を終えて帰る前。

アイツは俺を呼び出して、スクールの入っているビルの屋上へ連れ出した。

「鏡音クン」

「な、なんだよ？」

俺を目の前にして、思い詰めたような表情のまま立つアイツ。

「あ、あのさ……」

赤い顔をしてもじもじしているだけで、何か言いたい事があるけれどどうしても言えない、といった風情だ。

俺は直感した。

これは……。

「わ、私ね？ ある先輩から告白されちゃったんだ……けど……」
恥ずかしそうに、申し訳なさそうにそう言うアイツ。

その内容に驚いて、頭が真っ白になった。今まで誰から告白されても、俺にこんな風に相談なんてしてこなかったぞ？

じゃあ、これは本気ってことか？

今のままが良いなんて、都合の良い考えじゃやっぱりダメだったんだ。

驚愕と後悔が頭の中を真っ白に染めて、その真っ白になったままの頭が何も考えないで反射的に言葉を発する。

「よ、よかつたじゃん？ 憧れてた人なんだろう？」

あああつ！ 何を言ってるんだ？ 俺は？

「え？」

「え？」

そのまま二人とも黙ってしまった。見つめあいながらも、言葉が出ない。

それはそうだろう。俺からそんな言葉を聞くとは思っていなかったに違いない。

俺だって、そんなことが言いたかった訳じゃない。

バカだな、俺。何やってるんだ？

今言わないと、アイツは先輩とくつついちゃうぞ？ それで良いのか？

「あ……鏡音クン、喜んでくれるんだ……」

酷く落胆した表情でそう言うアイツ。

「い、いやっ……あのっ……」

アイツのそんな表情を見ると苦しい。

「そっか……。私たちはただの友達だもんね……」

泣きそうな顔をしている。

くるりと俺に背を向けた。

「うん。じゃあ……ね……」

アイツの肩が震えている。

そのまま、出入り口に向かって歩き出す。

最初はゆっくりと。でも俺が何も言えないでいると、そのスピードは増していった。

いいのか？

このままアイツを行かせていいのか？

早くしないと、アイツが帰ってしまうぞ？

今しかチャンスは無いんだぞ？

たった一言、告げるだけだ。

お前の心を。本当の気持ち。

言わないままにアイツを行かせて。アイツを泣かせて。

お前は本当にそれで良いのか？ 後悔しないのか？

俺の心の中で、もう一人の俺が叫ぶ。

「リン！」

俺は思い余って叫んだ。そして駆け寄った。

アイツを名前で呼んだことなんか、今までなかった。これが初めてだ。

「……………」

アイツが立ち止まる。

その華奢な後姿を、思わず抱き締めていた。

「ごめん、リン。俺、ずっと前からお前のことが好きだった。お前

が俺の傍からいなくなるのが怖くて言えなかったんだ。ごめん」

アイツの耳元で囁く、精一杯の言葉。

「ばか……………」

アイツは、アイツを抱いた俺の腕を抱き締めて、一言言った。

「ずっと待ってたんだから……………」

十五歳の誕生日。

俺たちは友達から恋人になった。

プロローグ1 レン（後書き）

本作品は、創作専用リンレンSNSに2009年五月末から、約一ヶ月に渡って掲載させて頂いた作品の加筆修正版です。

初期公開時と異なる点として、プロローグ1、2、エピソード1、2、3の追加と、新たに推敲を行い、全編に渡って表現の見直しを行いました。勿論公開時そのままの部分も数多く残っており、私の力の無さが存分に発揮された作品となっております。

この作品を書こうと思った直接のきっかけは、私が所属しているリンレンSNS内で『この曲が良いっ！』と話題になったからです。その際に初めて拝聴しました。

私の大好きなテクノ調のダンサブルな曲調。
切ない歌詞と、それを歌うVOCALOID『鏡音リン』の豊かな表現力。

そしてそれを最大限に引き出しているのりP様の調整。
全てが素晴らしく、一聴で虜になりました。

ところが、今作品には続編があったのです。それが『鏡音レン』版。

リン版の持っていた切なさが更にも増して、こちらも直ぐに夢中になりました。

その後、この二曲をベースに物語を考え出すのにさほど時間は掛からず、一ヶ月で一気に書き上げてしまいました。

最後に、素晴らしい楽曲を作ってくれたのりP様と水野悠良様に最大限の感謝を。

そして、その素晴らしい楽曲を歌ってくれた『鏡音リン』『鏡音レン』にも感謝を捧げます。

そしてそして。

お忙しい中、この作品を読んで下さったあなたへ。
最大限の謝辞をお送りします。
もしまたどこかでお会いしたら、宜しくお願いしますね。

るいはりひ

すい 拝

プロローグ2 リン

十五歳の誕生日を境に、私たちは今まで以上に一緒にいるようになった。

スクールの講座も一緒。食事も一緒。

その頃から覚えた『悪い遊び』も一緒だった。

そう。

この頃から、私たちはクラブに入り浸るようになっていた。

二人でいるときは幸せだったけれど、いつもいつも一緒というわけにもいかない。私たちはまだまだ子供だから、ずっと一緒にはいられないのだ。

早く大人になりたい。

早くデビューして、レンと二人きりになりたい。

その為にも、しっかりと勉強して、練習して、早く一人前にならなくちゃ！

そう思うと、音楽スクールの勉強にも力が入った。今まででも成績は充分優秀な方だったと思うけれど、私のその想いは今まで以上に私に気合を入れさせた。

とはいうものの、音楽スクールの講座はどんどん難しくなるし、その間に受けたオーディションにはことごとく落ちるしで、私たちは二人とも精神的に疲れていた。

そんなある日。

実習でライブ出演があった。その会場がクラブだった。

この実習では、実際に観客の前に立って歌を披露する。その時のステージングまで評価の対象になるという難しい実習だ。

この時の内容は、私とレンの他に三人参加者がいて、合計五人が一人三曲ずつ歌って観客の評価を得るというものだった。本来ならライブハウスで行う実習なのだけれど、このクラブは普段からライブハウスのような運営もしているということで選ばれたらしい。

ライブハウスでの実習は私も経験があるけれど、ここはクラブなので、観客席とステージとの間に段差が無くてちよっと雰囲気が違う。そこが面白いところだ。

自分たちの出番が終わった後、会場内で待機しているように言われていたので、私とレンは二人でダンスフロアに出てみた。

初めて見るクラブのフロア。

ステージから見る光景とは全く異なる異空間。

そこは音と光と魂の解放区。

クラブ内の音と光の全てがここにあった。

音に酔い痴れる観客に混じって、その陶酔感を味わう。

耳をつんざく強烈なビートは心の中の嫌なことを全て忘れさせてくれて、その高揚感は心地良い陶酔をもたらしてくれる。

音に合わせて自然と脚がステップを踏む。身体が動く。腰が踊る。

私たちは一発でその虜になった。

私の前にレンがいて、レンの前に私がいる。

それ以外のモノは何も目に入らない。

その瞬間、間違いなく世界は私たち二人だけのものだった。

どちらからともなく、二人の身体が近づくと

肩に触れる。

手を握る。

腰を抱く。

そして……。

初めて触れたレンのくちびる。

夢中でレンにしがみついた私の腕。

きつく私を抱き締めるレンの腕。

一度目は甘く。

二度目は激しく。

私の中に入ってくるレン。

吸いあう。絡まりあう。求めあう。

ホールを満たした激しいリズムが私たちを熱くさせ、初めてなの

に身体が燃える。心が燃える。

いつの間にか私たちは、フロアの隅で踊ることも忘れて、お互いを求めて絡みあっていた。

どれくらい時間が過ぎたのか。

気がつくとき、実習に来ていたはずの同級生や講師たちはフロアにおらず、私たちは取り残されたようだった。

ホール内は変わらず爆音が支配していて、そこで踊っている観客の姿も変わらない。

「ま、いつか！」

二人してそう言って笑って、再びフロアに飛び出していった。

その日以来、クラブは私たちの溜まり場になった。

どちらかが先にスクールを出たらクラブで待つ。

どちらかがバイトで遅くなるときはクラブで待つ。

クラブで簡単な食事を取って、クラブで一緒に踊り弾ける。

疲れたら一緒にホールの隅に行って休憩。夢を語る。

そんな日々が二年続いた。

私たちは毎日のようにクラブへ通い、歌い、踊り、求めあった。

クラブ仲間も増えていった。

仲間はみんな私たちより年上だったけれど、私たちをぞんざいには扱わずに可愛がってくれた。

彼らの中に、ピアスやタトゥーを入れている人がいた。

自分たちの主張を織り込んだその姿は、私の目にはとても格好良く映り、憧れていた。

「ねえ、レン？ 私たちもお揃いで何かしない？」

ちょうどその頃、私にはスカウトがやって来ていた。

彼女は、私の事を絶賛する反面、レンのことは心良く思っていないみたいだった。

私はそれが気に入らなかつたけれど、でも遂にデビュー出来るかもしれないという嬉しさで、少しのことなら我慢する気持ちにもなっていた。レンには悪いけれど、折角のチャンスだ。これを生かし

て、早く一人前になりたい。

もしデビュー出来たら、契約金とか入ってくるから、経済的に今よりは格段に安定する。私がレンを支えることも出来るだろう。一緒に住むことだって出来るかもしれない。そうすれば、今以上に一緒にいられる時間が増えるのだ。その為なら少々のはことは我慢しようと思っただ。

ところが、話が進んでいくに従ってスクールの練習だけではなく、デビュー準備などにも時間をどんどん取られるようになってきた。

その為、私がクラブに行けない日々が続いて、ここ最近レンと逢いにくくなっていた。私はそれが大いに不満だった。

だからお揃いのタトゥーを入れて、私たちの絆を深めようと考えたのだ。

私の提案に、レンは直ぐには乗ってこなかった。仲間たちから聞いたデメリットが頭の中に浮かんでいるらしい。

でも。

「そんな偏見は、私たちが撥ね返さない」と

私の言葉に、そしてその強い意志に最後は根負けしたのか、レンは認めてくれた。そして施術してくれるショップを見つけてくれた。「モチーフは何にしようか？」

「蝶がいい。蝶って確か、復活とか魂とかの象徴って言うじゃない？」

「そうだったけ？」

そんないい加減な知識しかなかったけれど、女の子らしいモチーフとして多く使われていると聞けば、それはそれで良いかと思ってしまう。

だって、このタトゥーはレンとお揃い。

私とレンが、これからずっと一緒にいるっていう、誓約の証。

ずっとずっと付き合っていく絆なんだから、カワイイのが良いじゃない？

仲間に教えてもらったお店で施術してもらった。驚いたことに夕

ダでもらえた。

「君たちの、その強い絆を見せてもらったからね」

店長がそう言って、私たちを励ましてくれた。

そうよ。

私たちは絶対に離れない。

今は少し、私の方が忙しいかもしれないけれど。

今は少し、私の方が先行しているかもしれないけれど。

私たちは二人一緒に生きていくのよ。

私たち二人の右肩に紫色の蝶が舞い降りたその日。

私たちはその蝶に誓った。

1 レン

「あれ？ これタトゥーでしょ？」

自分のプレイが終わった後、カウンターに陣取って休んでいると、ある女性が声をかけてきた。

「紫色の蝶なんて女の子みたい」

「……うるさいな」

こっちはさっきまでターンテーブルを廻していたから疲れているのに、何だ？ こいつ？

「ねえ、レン。さっきのプレイ、良かったよ？ また今度も出てくれない？」

ああ、そうか。

この女性、今夜のパーティーの主催者だ。どうでもいいことだからすっかり忘れていた。

胸元の大きく開いた赤いドレスを粹に着こなした彼女は、カウンターに座った俺の隣にすっと腰を下ろした。長くすらりとした魅力的な脚を綺麗に組み、カウンターに肘をついて、上目遣いに俺の顔を覗き込んでいる。どうやら放っておいてくれないらしい。やれやれ。疲れているのにな。

「久しぶりにレンの歌声も聴けたし。いいよねえ、レンの声。繊細で、でも力強くて。最近は全然歌の仕事を入れてないみたいだけど、どうして？ 以前みたいに歌わないの？」

「うるさいな！」

畳み掛けてくる彼女の高い声は、ホールに響くデジタルビートよりも煩かった。

「俺はもう歌わないって決めたんだよ。今夜のは気紛れだ」

「ふふ〜ん。知ってるもんね、私。レンが歌わなくなった理由」

「何っ？」

からかっているのか、彼女はそんなことを言った。そしてその言

葉に簡単に乗せられてしまう俺。ダメだ。まだまだ吹っ切れていない。

「彼女にフラれたからでしょ？」

「ち、違う！」

俺は顔を赤くして反論した。

「え〜？ そうかな〜？」

悪戯っぽく俺の顔を覗き込む彼女。ちくしょう、何でもお見通しって顔をしている。

「レンは優しいからねえ。自分が傍にいたら必ず彼女を傷つけるからって、自分から身を引いたんでしょ？ほんと、男前だよねえ」

彼女はしみじみとした口調でうんうんと頷きながらそんなことを口走った。

違う。そうじゃない。

俺は気がついてしまったんだ。

俺じゃアイツの傍にはいられない。

アイツは天才なんだ。

アイツはもつともつと上を狙える。

でも、俺がいたんじゃ、邪魔になる。

あの日、お揃いでタトウーを入れた。

俺とアイツ。両方の右肩に。

それは変わらない想いを込めた儀式のつもりだった。その熱い想いは今も変わらない。

でも。

アイツを知れば知るほど、大切に思えば思うほど、傍にいられなくなる矛盾にも気付いてしまった。

アイツの才能はズバ抜けている。

当時はまだ原石だった。でも俺には分かっていた。

アイツは、きちんと磨けばとんでもなく輝く宝石だ。

長い睫。大きな碧い瞳。形の良い魅力的な桜色のくちびる。眩いばかりのプラチナブロンド。透けるように白い肌。そして伸びやか

な肢体。

誰もが振り返らずにはいられない天使のような完璧なルックスと、聞いた者全てを虜にする天性の歌声。その全てがアイツを他の誰よりも際立たせる。

正に聖少女と呼ぶに相応しいアイツに、俺はタトウーを入れさせてしまった。

その頃の俺達は若かったし、それがどんな意味を持つのか、あまり深く考えていなかった。ただ二人の絆の証とだけ考えていた。

永遠に消えない証。これほど俺達にふさわしいものは無いと、そう思っていた。

しかしそれは、端から見れば幼稚で滑稽な子供騙しの屁理屈でしかなかったのだ。

アイツは、俺と付き合いながらも、恐るべきスピードで成長していった。俺はアイツの音楽的な成長の早さに舌を巻いた。そして気付いた。

これからどんどん大きくなるアイツは、きっと直ぐにデビューするだろう。そうすれば、今後色んな場面で肩を晒す場面があるかもしれない。

その時、右肩にタトウーがあるなんて、どうだろうか？

まだまだ世間の視線は、こういったことに対して厳しい。

もしこんな姿をマスコミに撮られてもしたら……アイツの将来は台無しだ。俺の所為でアイツの才能を、将来を、摘んでしまう恐怖に俺は震えた。

だから……離れた。

アイツはそんな俺を責めた。

『そんな偏見は、私達で撥ね返さない』

そうやって俺を責め続けた。

確かにアイツの言うとおりだ。そんな偏見に負けてちゃいけない。でも、俺は怖かった。

俺一人だけならいい。何とでも言うがいいさ。

でもアイツを巻き込むことだけは避けたかった。

俺には戦う勇気が無かった。怖かったんだ。

だから離れた。

我ながら情けないと思う。

アイツと初めて出会い、初めてキスをしたこのクラブで、アイツと別れた。

アイツは泣いていた。

彼女はそれを知っている。

だからこんな風に俺をからかうのだ。

「ピアス、増えたね」

彼女が俺に囁いた。もう目は笑っていない。声色はむしろ優しげだった。

「いくつつけてるの？」

「さあ？ もう忘れた」

「自分の耳なの？」

「どうでもいいんだ、そんなことは」

俺の両耳にはピアス、イヤークフが所狭しとついている。

それは、俺がアイツを思い出す度に増やしていった罪の証。アイツに対する懺悔の証。

忘れなければいけない。

俺はアイツを裏切ったんだ。

そんな俺がいつまでも想いを残しておくなんて、アイツに対して失礼だ。

そう思いながら、忘れることなど絶対に出来ないことも良く分かっている。

だから。

ピアスが増えている。

後悔の念、自責の念に駆られる度に、俺は衝動的にピアスを増やしてきた。まるでそうすることでアイツに詫びているかのように。

もう耳にはつけられる場所はなくなった。今夜はどこにつけよう

か。

爆発的な光と強烈なリズム。耳をつんざくギター。不協和音を奏でるシンセサイザー。腹に響くベースとドラムの重低音の波。観客を煽るDJの声。心を開放し全てを忘れて踊り狂っている観客達。激しいビートがホール内を満たしたクラブにしながら、俺の心はちつとも満たされない。

「……帰るよ」

「お疲れ様」

彼女はそう言っただけで俺を解放してくれた。俺を見送る彼女の目がか言いたげだったけれど、でも何も言わなかった。それが嬉しかった。

俺はクラブを出た。階段を上がり、地上に出る。

外は雨が降っていた。

まるで俺の心の中のような土砂降りだった。

2 リン

「あら？ 今日のタトウは、いつもよりはつきり見えるわね」

今夜のステージが終わった後、ホテルに戻ってシャワーを浴びていたら、いつの間にかマネージャーが私の部屋にいた。

バスルームからタオルだけ巻いて出てきた私を、部屋にあるソファに座って眺めている。

「肌が上気しているからかしら。とても素敵よ」

深いスリットの入ったロングのタイトスカートから形の良い脚を覗かせ、それを見せ付けるように組み替えながら、彼女がにこやかに言う。

そんな事、これっぽっちも思っていないくせに。

「何、やってるのよ？ ここで！」

私は声を荒げた。

いくらマネージャーでもやって良いことと悪いことがある。

「リンちゃん、いくら内線電話で呼んでも出ないから何かあったのかと思って」

だからといって、鍵をかけている部屋に勝手に入って良い道理はない。心配している振りをして私を監視しているだけだ。

「ふざけないで！ 出て行きなさいよ！」

「ああ、ごめんなさい。でもちよっとお話があるんだけど」

彼女はニヤリとして私を見た。こいつがこんな顔をしている時はるくなことがない。

あの時もそうだった。

私からレンを奪ったあの時。同じようないやらしい薄笑いを浮かべていたっけ。

「何よ？ 聞くだけは聞いてあげるわ」

「そうこなくっちゃ」

嬉しそうな顔をしているけれど、その目は笑っていない。

猛禽類のような鋭い目つきに、その不自然な笑顔は似合わない。

「この街にレン君がいるらしいわ」

レン！

その言葉に、私は動揺した。

思わず右肩のタトウーに手を伸ばす。

「私の大事な商品にこんな傷をつけてくれたレン君、絶対に許さないからね」

「それは違うわ！ これは私が望んで入れたものよ！」

「あなたも自覚が足りないわね。まだそんな事を言ってるの？ いい？ あなたは私の商品なの。あなたの意思なんてないのよ。誰のおかげでこれほど売れたと思っっているのよ？」

「……」

私は何も言えない。

幼かった私は彼女の口車に乗ってしまったからだ。

レンと付き合っていた音楽スクールの練習生の頃、知人の紹介で彼女と出会った。彼女は自分を『音楽事務所のスカウト』だと言って私の歌を絶賛してくれた。これなら今直ぐにでもデビュー出来ると言ってくれた。

嬉しかった。

やっと私の歌が認められたのだ。

長かった。本当に長かった。

今まで散々オーディションを受けて落ちていたけれど、頑張ってきて良かった。レンに報告したら、レンも自分の事のように喜んでくれた。

でも。

彼女は、同じように歌を歌っているレンのことは酷評した。そして、私たちは離れるべきだと言い出した。

私にはそんなつもりはなかった。タトウーを入れたのはその頃。ずっと一緒にいるという誓いの証として、二人でお揃いの紫の蝶を右肩に入れた。

それを知った彼女は逆上した。

彼女は私の知らないところでレンを呼び出した。

二人が何を話したのか、私は知らない。

それつきり、レンは私の前から消えた。

携帯は繋がらない。部屋に行ってももめけの殻。手がかりは全く無い。文字通り消えたのだった。

最後にクラブで逢った時、少し元気がなさそうだった。タトウを後悔するような事も口走っていた。私はそんなレンが悔しくて、泣きながら声を荒げて叱責したものだ。

でもまさか、失踪してしまうなんて。

信じられない。

私は直感した。

彼女だ。彼女がレンに何か吹き込んだのだ。

私は彼女に食ってかかった。しかし、当然彼女は知らないと言い、話はそれで終わった。

私は後悔した。

私は歌が大好きだけど、それ以上にレンが大好きなのだ。レンがない世界なんて、私にとってはどうでも良かったのだ。

それなのに……。

私は激しく後悔した。

そんな時、彼女が囁いた。

『あなたが歌で大きくなったら、見つかるかもしれないわよ』

今思えばそれは、彼女が私を自分のものにするための詭弁だったのだ。

しかし、そのときの私は、レンを探すためなら何でもするつもりになっていた。だから内容などろくに見ることもせず、彼女の出てきた書類にサインをした。それが悪魔の契約書だということに気が付かず。

気がつくとは私は、彼女の音楽事務所の一契約アーティストということになっていて、その契約内容は恐ろしく私に不利なものだった。

年間発売数は通常の3倍。一年中どこかでライブを開いていて、もちろん全ての生活はホテル住まい。完全なオフなどない。私には始終彼女が傍につき、私の自由になるお金は一銭たりともないのだ。それこそ食事から持ち物、洋服、下着に至るまで、全て彼女の管理下にある。

契約期間は十年。事務所側が望めば、私の意志など関係なく延長が出来るオプシヨン付。

もう一生、私はこいつの奴隷だ。

いくら歌が好きでも、こんな状況では歌えない。でも歌わないと生きていけない。何よりレンを探す手段が無くなる。私は彼女の望むままに歌った。

確かに歌は売れた。私の実力なのか、彼女が持ってくる楽曲が良いのか、宣伝広告が素晴らしいのか。多分その全てが当て嵌まるのだろう。今を時めく『緑の女王』に迫る勢いで快進撃を続けている。他人に話せば、誰もが羨む状況なのかもしれない。

でも。

レンがいない。

レン！

今、どこにいるの？

「今日、この先にあるクラブに出演したらしいわ」

彼女は事も無げにそう言った。

「もう出演時間は終わった頃だけど。……彼、無事に帰れると良いわね……」

彼女の鋭い目が一際光った。まるで爬虫類のように舌を出して、真っ赤なルージユの塗られた艶やかなくちびるを舐める。

「何？ レンに何をしたの？」

「別に何も。自分のやったことを反省してもらっただけよ？」

「あなた……」

私は絶句した。

こいつ、絶対何か企んでいる！

「出て行って！ 出て行ってよ！」

私は絶叫した。叫びながら彼女を部屋から追い出す。

「リン、変なことを考えないことね。今、スキヤンダルを起こすと困るのはあなた、そしてレン君よ」

部屋を出る間に、彼女はそう言っただけで私に釘を刺した。

彼女を追い出した部屋で。

私は床に膝をつき、泣き崩れた。大声で号泣した。絶叫した。きつと扉の外で見張っている彼女にも聞こえていたに違いない。

レン……レン……レン！

逢いたい。逢いたい。逢いたいよお！

熱い。

右肩が熱い。

私たちの絆だったこの紫色の蝶が。私とレンとを唯一繋いでいるこの誓いの証が。

燃えるように熱い。

熱く燃える右肩を抱きながら、窓辺に立って外をしてみる。

外は土砂降りの雨。

この街のどこかにレンがいる。

そのレンに危険が迫っている。

私はいてもたってもいられなくなった。

あの女のことだ。手段は選ばない。自分の邪魔になるものは徹底的に排除してきた女だ。

私はあの女のマネージャーとしての手腕は認めている。業界内でも『敏腕』とか『やり手』だとか言われて恐れられているくらいだ。そのやり方は徹底して冷酷。彼女に逆らった関係者の末路もたくさん見てきた。敵に回すと恐ろしい相手だ。

そんな彼女にレンが狙われている。

私は手早く支度をすると、こっそりと部屋を出た。

不思議なことに彼女はいなかった。普段なら、彼女が彼女の助手が見張りとして私の部屋には張り付いているのに。

これはチャンスだ。

私はそのまま部屋を出た。

部屋を出て、エレベーターに乗って、ロビーを突っ切っても、私は誰にも会わず、誰にも声をかけられなかった。

土砂降りの中、私はレンが出演していたというクラブを目指してタクシーを飛ばした。

土砂降りの中、彷徨うように深夜の街を歩いた。

傘など役に立たない大雨。俺はたちまちずぶ濡れになった。

少し霧が出ている。街の景色が煙っていて、通り慣れた道のはずなのに迷いそうになった。

目を凝らしていないとわからないようにひっそりと、その小さな店はある。看板の無い、その古めかしく重い木製の扉を開く。

「いらっしやい」

この店に来るのは、もう何度目になるのだろう。最初はリンと一緒にタトウーを入りに来た。その後は……いつも一人で来ている。

入り口を入った正面にあるテーブルの上に、ずらりと並べられた鈍い光を放つステンレスの数々。形状や大きさは様々。丸いリング状のもの、バーベル状のもの、糸車のような形状のものもある。壁には耳にかけるタイプのものが所狭しと並んでいる。

そう。ここはピアスショップだ。いつの間にか俺のいきつけになってしまった店だ。

店内に並ぶそれらを一瞥しながら、俺は薄暗い店の一番奥にあるカウンターへと向かった。

「こんばんは、店長」

「こんばんは。そろそろ来る頃だと思っていたよ」

白いYシャツをラフに着て、冬でもないのにトレードマークの青いマフラーを首に巻いている店長が迎えてくれた。

「まだ良かったかな？」

「そんな泣きそうな顔をして来たレン君を追い返せるかい？」

「ありがとう」

そうか。そんなひどい顔をしているのか、俺は。

「おやおや、ずぶ濡れじゃないか。ちょっと待ってて。タオルを取ってくる」

店長はそう言って、カウンターの裏にある事務室に消えた。俺は、待っている間、店内を物色していた。

「またピアスカい？ もう耳にはつけられるところが無いよ？」
事務室から出てきた店長が、俺にタオルを放りながら言った。

あくまでも爽やかに店長は振舞う。この人はいつもこうだ。俺がここに来るときは落ち込んでいることが殆どだからなのか、一見わざとらしくくらいに明るく爽やかに応対してくれる。それがまた堪えるのだけれど、好意でしてくれていることなので何も言えない。

「じゃあ、今度は舌にでも入れようかな」

「それはダメ！」

珍しく店長が声を荒げた。

「え？」

「レン君。君、元々歌手でしょ。舌や喉を痛めるようなことはしちやいけない」

「店長……なんで俺が元歌手だって知ってるんですか？」

「僕もここでこんな店を出して長いからね。色んな情報が耳に入ってくるのさ」

そうか。店長も知っていたんだ。俺の事。リンの事。

ちえつ。自分の知らないところで自分の情けないところが有名になっっているっていうのは、あまり気分の良いものじゃないな。

「また思い出してしまったんだね」

優しい笑顔の店長が言った。その声色さえも優しい。

「うん……」

「忘れることは……出来ないよなあ」

「うん……」

「じゃあ、取り戻すか」

「え？」

店長、今、なんて言った？

「それだけ後悔しているなら、もう一度逢って良く話してみることだね。そして、あわよくば取り戻してしまおう」

「……それは……出来ない……」

俺と別れてデビューしたリンは、その後驚くような速さで成長を遂げ、今やこの国を代表するスーパースターの一人だ。毎日を忙しく、街から街へ飛び廻っている。そんな彼女にどうやって逢う？ まして昔のような関係に戻るだなんて……。

「そうかな？ 後悔しているのは君だけじゃないかもしれないよ？」

「そんなことは無い。アイツは今のままがいいんだ。アイツは希望通り、歌で成功した。俺と一緒にでは達成出来なかったアイツの夢だ。他に何の不満がある？」

「さてね」

店長が微笑みながら答えをはぐらかす。

俺はそんな店長の態度に怒りを覚えた。

何も知らないくせに。

俺たちの事を、何も知らないくせに！

何故笑いながらそんなことが言えるんだ！

狭い店内の中、カウンター越しに話している俺達。そのカウンターの上に、店長は一冊の週刊誌を差し出した。

『悪魔の歌姫！ 隠蔽された驚くべき鏡音リンの素顔』

その週刊誌の見出しにはそんな言葉が踊っていた。

「な……」

俺は絶句した。

「ちよつと見せて！」

ひつたくるようにして週刊誌を奪った俺は、貪るようにその記事を読んだ。

そこに書かれたリンは、同業者やライバルを徹底的に叩き潰し、歌を売るためなら何でもするような、正に悪魔と呼ぶにふさわしい姿だったのだ。表の煌びやかな歌姫の姿からは想像も出来ない醜悪な裏側の顔。これが、あのリンだと言うのか？

「バ……バカな……」

俺は膝ががくがくと唾うのを必死で堪えながら、そう言うのがや

つとだった。

リンが。

あのリンが。

あの天使のように清らかで美しかった、あのリンが。

まさか！

まさか！ まさか！！

「こんなはずは無い！」

俺は思わず大声で叫んだ。

「この週刊誌は少し前のものなんだけどね。この記事を書いた記者も行方不明らしいよ」

笑顔のまま、店長が爽やかにさらっと恐ろしいことを言う。

な……！ 記者が行方不明？ 何だ？ それ？

「彼女のバツクにはかなり強力な事務所がついているらしいね。ここに来た時は可愛かったけれど。そうか……変わっちゃったんだなあ」

「店長っ！」

店長の言葉に我慢が出来なかった俺は、店長を睨みつけながら声をあげた。

何も知らないくせに。

リンの事、何も知らないくせに。

どうしてそんな事を言うんだ！

「はははっ。ゴメン、ゴメン。冗談だよ。レン君の好きな子だ、そんなことをする訳がないだろう？」

涼やかな表情で俺の怒りを笑い飛ばす。

「僕だってそれなりに人を見る目は持っているつもりだ。彼女はそんな子じゃないよ」

店長の言葉に全身の力が抜けた。怒りが急速に冷えていく。何だよ、人が悪いな。

「ただ……」

「ただ？」

「周りはどうだろうね。彼女、利用されているんじゃないかな？」
「利用……されている？」

「そう。彼女の才能は本物だ。それだけに、群がる連中も妙なものが多い」

店長？

「音楽や演劇のような興行の世界では良くあることさ」

店長が少し悲しげに言った。

「ただ音楽が好き。それだけでは渡っていけない、汚い世界だ」

店長の、まるで独り言のような話を聞く俺は、声が出ない。

「一人、売れっ子を掴むとしばらくは安泰だ。その子が歌い続ける限り、連中は寄生虫のように喰らいつく。吸い尽くして抜け殻になったところで捨てる。何か売れなくなるような問題を起こしたら……お払い箱だ」

「それじゃ……」

「多分、彼女のバックにいる連中はこの手合いだろう。彼女を売り出すのに君は邪魔だ。だから処分された。心当たりがあるんじゃないかい？」

そうか。

あの時、あの女が言った言葉。

『あなたはリンちゃん成功の障害でしかない』

『あなたが入れさせたタトゥーの所為で、リンちゃんは苦しむことになる』

あれはそういう意味だったのか。

「彼女が歌えなくなったら……きっと彼女自身も処分されるだろう」

「ま、まさか……」

全身の血が音を立って引いた。

「気をつけなさい、レン君。君が相手にするのは、そんな連中だ」

店長はいつもの爽やかな笑顔をしていない。初めて見るひどく真面目な表情。厳しい瞳。

店内に緊張が走った。

その時。

店の外にクルマが止まった。ドアの開閉する音が聞こえる。

「タクシーかな？　こんな時間に？」

俺は入り口の扉の方を向いた。

突然。

嵐がやってきた。

それは扉からやってきた。猛烈な音が連続して叩きつけられる。

一瞬にして入り口の重厚な扉がぼろきれのように吹き飛ばされて粉々になっていた。

「伏せてっ！」

店長が叫んだ。

俺は言われるままに、その場に伏せた。

轟音に包まれた店内は、辺り一面にステンレスの鈍い光が跳ね回っていて、一体何が起こったのか全然把握出来ない。

耳を塞いでうずくまる俺の頭上を、何かが猛烈な勢いで飛んでいる。それは十や二十といった数ではない。俺がさっきまで被っていたタオルはあつという間に糸屑になった。

目に見えない轟音の主は……銃弾だ。近くに空いた連続する着弾の痕を見て、付近にたちこめた強烈な火薬の匂いを嗅いで、俺は震え上がった。

テーブルが、陳列棚が、店内にある全てのものが次々に粉碎されて……。

唐突に音は止んだ。

クルマの急発進する音が、店の外から聞こえた。

俺は……今起こったあまりの出来事に、伏せた身体をすぐには起こせなかった。

「やれやれ。やってくれたなあ」

ボロボロになったカウンターの向こう側に隠れていた店長が、よつと声を出しながら立ち上がり、飄々とした声色で爽やかに言った。

「こ…これは？」

「まあ、こういうことさ。殺すつもりは無かったみたいだけどね」
穴だらけになったカウンターを飛び越えてこちら側にきた店長は、
真っ青になって伏せたままの俺の手を引いて起こしてくれた。

「大丈夫だったかい？」

「ま、何とか」

「そうか。良かった」

店長がほっとした表情で言った。店長のYシャツやGパンが埃まみれになっている。

「今のは？」

「警告……なんだろうね。多分、彼女が君に助けを求めているんだろっ」

「リンが？」

「おそらく。言うことを聞かなくなったとか、そんなところじゃないかな」

「それじゃあ……」

「君はあんな雑誌の記事を本気にしていたのかい？」

「いや……それは……」

「さあ、王子様。お姫様を助けにいかなくちゃ！」

店長はそう言って俺の肩を叩いた。明るく言い放ったその言葉の通り、店長の顔はこれ以上ないくらいに眩しい笑顔だった。

そっだ。

俺はリンのためだと思って離れたのに、これじゃ……ただの卑怯者だ。

リンは戦っている。自分の運命に。

ならば、俺のすることは一つ。

「リン。今、迎えに行くぞ」

俺の右肩の蝶が熱く燃えていた。

4 リン

とあるビルの前でタクシーを降りた。

住所の書かれたメモを見せると、タクシーは何の問題も無くここまでやってきた。何故か、あの女はクラブの住所が書いてあるメモを私の部屋に置いていっていたのだ。

もしかして、罠？

そうも思っただけで、でも今はそんなことを勘繰っている場合じゃない。レンに危険が迫っているかもしれないのだ。

階段を駆け下りて、入り口の扉を開く。

猛烈な音圧が私を迎えた。

雷鳴のように瞬くフラツシユ。耳をつんざく落雷のようなギターとシンセサイザーの高音。地面を揺るがす地震のような激しいベースとバスドラムの重低音。全てが渾然一体となった心地好いリズムとメロディ。ホールの中を、まるで麻薬のような陶酔感が満たしている。

ここは……。

私はここを知っている。

何故思いつき出さなかったのだろう。

ここは、私とレンが初めて出会い、初めてキスをした、あのクラブだ。

あの頃、レッスンの後で良く二人で通った。朝まで踊り明かした。踊り疲れると、レンは良くDJの真似事をしてオーナーに叱られてたっけ。それを見た私が大笑いして。懐かしいな。

懐かしい記憶を思い出しながら、ホールの中に入る。

激烈なダンスビートに心を奪われ、狂ったように踊り続けている客の間をぬって、レンを探す。

どこ？ どこにいるの？

ダンスフロア内をきょろきょろしていると、その場所を見つけた。

ここだ。

フロアの隅のこの場所で、隠れるようにして、私達は初めてキスをした。

背の高いレンは屈んで、背の低い私は精一杯背伸びをして。

レンが私を抱き締めてくれたことが嬉しくて、私もレンをぎゅっと抱き締めた。私より硬くて逞しいレンの胸はとても広くて、きつく抱かれると包まれるその感触に安心出来た。

「お久しぶりね。歌姫さん」

誰かに声をかけられ、甘い想い出から目が覚めた。ふと我に返る。声の主は、正面に立っていた赤いドレスの女性だ。胸元の大きく開いた挑発的なドレスをすらりと着こなすその姿は、私なんかじゃ到底太刀打ち出来ない大人の艶やかさを全身から発している。

「あなたは？」

でも、私は彼女に覚えがない。

「そう……か。覚えていないか……。残念ね」
心底残念そうな表情をする女性。こちらの方が申し訳なくなっていく。

「歌姫って？」

「何言ってるの？ あなた鏡音リンでしょ？ あなたを知らない人間なんてここにはいないわよ」

「そんな事ないわ。どうしてそう思うの？」

「あなた、実力で成功を勝ち取ったアーティストなんでしょ？ ここにはそんな夢を追っているタマゴ達がいっぱいいるからね」

「そう……」
普通なら嬉しくなるような言葉だけれど、私はちっとも嬉しくない。

私の成功は、果たして私の力で達成出来たものなのだろうか？

いや、そもそも今の私は成功したと言えるのだろうか？

そんなことを思っていると、それが顔に出たのだろうか、彼女が心配そうに言葉を続けてきた。

「何よ。もつと自信を持ちなさい。状況はどうあれ、あなたは成功した。運を味方につけるのも実力よ」

「そうかしら……」

「例え、好きな男を切り捨ててでもね」

その冷たい言葉に、はつとなつて彼女を見た。

彼女の目が厳しくなっている。元々優しげな表情の彼女がそんな厳しい顔を見ると、有無を言わさない迫力があつた。

何故？

何故あなたがそのことを知っているの？

彼女の言葉に疑問を感じた私の表情がそんなに面白かつたのだろうか。彼女は笑い始めた。大声で爆笑し始めた。

私は少し気分が悪くなつた。

「何がそんなにおかしいのよ？」

「いや別に。人間つて欲張りだなつて思つてね」

彼女の笑いは止まらない。これはただの笑いではない。嘲笑だ。私を嘲っている。

「あなた、好きな男を捨てて成功したんじゃない。その上で、やっぱり男も欲しいなんて、虫が良すぎると思わない？」

その言葉に、私は我慢が出来なかつた。

「あなた！ 私とレンの事、何にも知らないくせに、勝手なこと言わないでもらえる？」

「知ってるわよ」

「え？」

私は虚を突かれた。

何故彼女が私とレンのことを知っているの？ 何の関係も無いあなたはどうして？

「バカねえ。あなた、デビュー前にここにレンと一緒によく来ていたじゃない。そんなことも忘れたの？」

「……」

「あなたたちの事は、ここの常連なら誰でも知ってるわ。有名だも

の

彼女の目が光った。

「男を捨てて成功した歌姫と、その歌姫に捨てられた哀れな男の話
ってね」

「違う！」

「あなたに利用されて捨てられたのに、未だに彼はあなたの事を忘
れられないでいる。あなたに心を捉えられたままの可哀相な籠の中
の鳥……」

「違う！ 違う！」

「そんなあなたが、今頃何をしに来たの？」

「全然違うわ！」

私は叫んだ。レンは私の大事な人だ。どうして利用なんてするも
のか！

「何が違うのよ？ 事実、レンはあなたの事を思っ
てあなたから離れた。あなたがマネージャーを通じて伝えた言葉、みんな知っ
てるわよ」

「えっ？」

そんな話は聞いていない。あの女、レンにどんな酷い事を言っ
たの？

「あんな汚い言葉、私の口からとても言えないわ。よくもあんな酷
い言葉を元カレに言えるわね」

彼女は心底嫌悪するといった口調で私に話す。その軽蔑しきって
いるような視線が痛い。

「マネージャーが何を言ったか知らないけれど、私はレンと別れる
つもりなんかなかったんだから！」

「口では何とでも言えるわよね。あーあ、可哀相なレン。こんな女
に今も心を奪われて、新しい恋も出来ないなんて」

彼女の呆れたような口調には、レンへの侮蔑が含まれているよう
に聞こえた。私はますます腹が立った。

私のことは何とでも呼んでいい。鬼でも悪魔でも魔女でも、好き

なように呼べばいい。

でも、レンを馬鹿にすることは許さない。絶対に許さない。
私はかっとなって彼女の腕を掴んだ。

「何よ？ 超有名な歌姫さんが素人相手に大立ち回りじゃ、安っぽいスキヤンダル雑誌の格好のネタだわ。ここにもそんないやらしい手合いはいっぱいいるわよ？ いいの？」

冷静にそう言う彼女の言葉に、私の頭は更に沸騰した。

「かまわないわ！ レンに失礼な今の言葉、取り消しなさい！」
「嫌よ」

あくまでも冷静な彼女。その哀れむような視線は……私に向けられている。

「好きな男を踏み台にしてその自覚が無いなんて、女として失格ね。最悪だわ」

「違っつ！」

私の精一杯の声は、フロアを満たしている重低音にかき消された。
「私のことは何とでも好きに呼びなさい。でもレンを侮辱することは許さない！」

私の右手が上がる。
そんな中でも、キツと私をきつく睨みつける彼女の目。私は彼女のその目に逆上した。

何も知らないくせに。何も知らないくせに。何も知らないくせに！
私がどれだけ悔しいか。

私がどれだけ悲しいか。
私がどれだけ寂しいか。

何も知らないくせに、聞いたような事、言うんじゃないわよ！
私の右手は彼女の頬を指して全力で振り下ろされた。

彼女の頬に当たる直前。
誰かに？まれた。

すんでのところまで止まった私の手を握っているのは、背の高い爽やかな笑顔を湛えた男性だった。

5 リン

「二人とも、そのくらいにしておきなさい」

私の手を取って、赤いドレスの女性を張り飛ばす直前に止めた男性が言った。

背が高い。私より頭ひとつは確実に大きいだろう。何故か埃を被った白いYシャツに青いマフラーを巻いている男性は、その爽やかな笑顔のまま、私とドレスの女性との間に割り込んだ。その仕草がとても自然なため、私は怒ることも忘れてしまっていた。

「ここじゃ人目につく。話なら奥でしょう」

私と彼女、両方に目を配って、彼が言う。

確かにそうだ。

いくらここがクラブで爆音が流れているからといって、フロア内で騒動が起これば嫌でも目につく。それでもなくても私はここでは悪い意味で有名らしいし、これ以上目立つ必要は無い。

男性は、近くを通りかかった黒い服の男の子に何やら話をした。

お店のスタップらしいその男の子は、『わかりました』と言ってホルの奥へ消えた。

「何よ、店長。止めないでくれる？」

男の子が去つてすぐ、赤いドレスの女性がむくれて、店長と呼ばれた男性に抗議をした。

「もうその辺で勘弁してあげなさいよ、メイコさん。あなただって事情は知ってるんだし、そんなにリンちゃんを苛めないの」

諭すようなその男性の言葉を聞いた『メイコさん』と呼ばれた赤いドレスの女性は、

「はははっ。なあんだ、バレてるんじゃないわねえ」

と、さっきまでの鬼の形相がまるで嘘のように明るく笑っている。

私が二人のやり取りを訝っていると、店長がこちらを向いた。

本当に爽やかな笑顔だ。怒りなんか忘れてしまいそうになる。

「ごめんね、リンちゃん。彼女、君を試していたんだよ」

「私を……試す？」

私は店長に聞き返した。

私は何を試されなくてはいけないのだろう。

「君が今でもレン君のことを好きでいるのか。必要としているのかを、ね」

店長は、顔は笑顔のままだけれど、目は全然笑っていない。むしろ私を尋問しているかのような厳しい目をしている。

「私が……レンのことを好きか、ですって？」

この人たちはレンの何なのだろう？

さつきから私を悪者のように扱って、試して。拳句の果てに『レンを必要としているか』なんて下らない事を聞いてくる。

「私がレンを必要としているか、ですって？」

そんな当たり前のこと、何故あなた達に言わなければいけないの？ 失礼にも程があるわ！

私はレンのもの、レンは私のものよ。あの日、紫の蝶に誓ったんだから。

わたしのそんな想いが顔に出ていたらしい。店長が苦笑しながら応えた。

「まあ、そんなにムキにならないで。僕たちは君の味方だから」

「えっ？」

「君は覚えてはいないようだけれど、君とレン君の右肩のタトゥー、施術したのは僕なんだ」

えええっ？ ウソっ？

思わず右肩を抱きしめる。

「だから君たちの事は良く知っている。メイコさんも同じ。彼女はここの責任者だから、君たちが二人でよく通ってきていたことを覚えてるんだよ」

私は驚いてメイコさんを見た。彼女は優しげにっこりと微笑んでくれた。

「ごめんなさいね、あなたを試すようなことをして。でも……」
メイコさんは笑顔のまま続ける。

「あなたが、報道されているように変わってしまったのなら、もうレン君には逢わせないつもりだったのよ」

彼女の優しい瞳が、一瞬険しくなった。その激情を隠した冷たい視線に、私はたじろいだ。

「変わっていないみたいで安心したわ。強気なのは相変わらずみただけだ」

メイコさんはクスリと吹き出した。もう優しい表情に戻っている。あの冷たい瞳はどこにも見えない。

ちえ、意地が悪いな。さっきまで本気で激怒していた私は、そんな二人に合わせる顔が無い。恥ずかしくて顔が赤くなる。

「お待たせしました。準備が整いましたので、こちらへどうぞ」

先程店長が声をかけた黒服の男の子が、私たちを呼びに来た。奥のボックス席へと案内される。店長、私、そしてメイコさんの順でボックス席へ向かう。

「レン、ここにいるんですか？」

私が訊ねると、答えは店長から返ってきた。

「それを知って、どうするの？」

「レンの身に何か危険が迫っているかもしれないの！」

私はホテルでのマネージャーとのやり取りを話した。レンについて何か知っているのなら教えて欲しいとも告げた。私は必死だった。

「ここにはいないのなら、レンに伝えて！ あの女は危険だわ！」

「危険なら、もう会ってきたよ」

「えええっ！」

メイコさんと私、二人同時に叫んだ。見事なハーモニーだった。

「参ったよ。マシンガンで僕の店は蜂の巣だ。しばらく営業は無理だね」

明るく答える店長。そんな店長に、メイコさんが私を押しつけて駆け寄った。心配そうに顔を覗き込む。店長の右腕にしがみつくメ

イコさんは、さっきまでの迫力などどこにも無い、可愛い一人の女性だった。

「あ、あなた。身体は大丈夫なの？」

「まあね、何とか怪我はしなかったよ。お店は無茶苦茶だけど」

「バカ。あなたの身体が一番大事でしょ？ 何とも無くて良かった」

二人のまるで夫婦のようなやり取りを後ろから見て、私は羨ましくなった。

昔、私もああだったことがある。レンと二人、一緒に歌い、一緒に笑っていた。

もうあの頃には戻れないんだろうか。

……戻れないんだな。

そう思うと、心が凍った。

私の足が止まる。周囲に目が行く。

ホールを満たしたデジタルビート。その中で楽しげに踊っている男の子、女の子。カウンターで囁き合っている男女。壁際で睦み合っている男女。その全てが、私には得られないものなんだ。

私が放った言葉ではない。でも、あの女はここにいるみんなが憎悪するような罵詈雑言でレンを貶めた。マネージャーは私の言葉として伝えたということだから、レンは彼女の言葉にきつと激しく傷ついているはずだ。

そんな私が、どうしておめおめと顔を出せるというのだろう。

どんなに詫びても、絶対に許してもらえない。私が出たこととは、そういうことだ。例えばそれが私の意志では無かったとしても、私の名前で行われた行為の責任は私にある。

私の瞳から熱いものが溢れてきた。

恥ずかしい。悔しい。情けない。悔しい。悲しい。悔しい。

レン。

寂しいよお！

「リンちゃん」

店長が私の右肩を抱いている。左側にはメイコさんが、やはり私

の手を取っていた。

「君はレン君に逢いたくてここに来たんじゃないのかい？」

「そ、そうだけど……」

「危険を知らせたかったんだよね？」

「そ、そうよ」

「だったら泣いてちゃ駄目だろう。ちゃんと伝えないと」

「で、でも……私、酷いことをしてしまったわ。私はそんなつもりじゃなかったし、そんなことをしるとは言っていない。私の知らないところであの女が勝手にしたことだけど、でも、レンを傷つけてしまった……」

「そして君も深く傷ついている」

「えっ？」

店長は優しく言った。

「君たちの絆つて、そんなに簡単に壊れるものなのかい？ その右肩の蝶は、その程度の覚悟の表れだったのかい？」

店長が私の右肩の蝶に触れた。触れられた蝶が熱くなっている。袖を捲つて蝶を外に出した。

私の白い肌にとまっている紫色の蝶。

「施術して時間が経ったから、色が少し落ちてきたね。でもいい感じに肌に馴染んできている」

店長は続ける。

「タトゥーは一度施術すると基本的には消せない。だから生半可な気持ちなら入れないんだ。どんなに頼まれても、どんなにお金を積まれてもね」

そうだった。思い出した。

練習生でお金の無かった私たちは、店長のお店に行ってタダでタトゥーを入れてもらったんだ。

「そうさ。君たち二人の絆は何よりも強く見えた。二人で成功し、二人で生きていこうと決めた固い覚悟が僕には見えた。だから施術した」

「店長……」

「タトゥーは、肌を彫るものだから施術中は痛い。馴染むにも時間がかかる。でも馴染んだときの美しさは素晴らしい。リンちゃんの白い綺麗な肌に、馴染んで少し色の落ちた紫色の蝶が良く映えてとても綺麗だよ。そしてそれはレンも同じだ。レンの蝶も、今頃は良い色になっているだろう。確かに痛い思いもするけれど、馴染んで出来上がった時の美しさは他に類を見ない」

店長はそう言っつて爽やかに微笑んだ。その眩しい笑顔は、見た者を安心させる癒しの効果がある。

「それは君たちだけの芸術だ。同じものは存在しない。それこそが君たちの絆を示してるんじゃないのか？」

店長はそう言い切った。その言葉を聞いて、私は何故か肩の荷が下りたような気がした。

「私には入れてくれないのよねえ」

メイコさんが横から口を挟んできた。少し甘い、でも非難めいたその口調に私は驚いた。

「ごめんよ。僕にはまだそんな覚悟が無い。僕はヘタレだからね」

「相変わらずズルイ男ね」

「じゅめんよ」

店長は自嘲気味に言った。その微笑みはどこか寂しげで、さっきまでの爽やかさはない。

「わかっているわよ」

メイコさんも、どこか寂しげに答える。

「さて、早くボックス席に行こう。話はそれからだ」

店長が私の肩を押した。メイコさんも私の手を取ったままついてくる。

踊り狂っているフロア内の客の間をぬって、私たち三人は黒服の男の子が準備してくれたボックス席に入った。

VIP席というのだろうか？ ドアは無いけれどきちんとした入り口があって、フロアとは薄い磨りガラスの壁一枚で隔てられてい

る。ちょっとしたソファとテーブルも置いてあって、充分個室と呼べるものだ。確かに落ち着いて話をするにはいいスペースかもしれない。

そのボックス席の中には先客がいた。

金髪のやや長い髪を後ろでちょこんと結んでいるその髪型。私と同じ蒼い瞳。

あれは……。

「レンっ！」

私は両脇の店長やメイコさんを振り切って、ソファに座っているレンに向かって夢中で飛び込んでいた。

急に名前を呼ばれたレンがこちらを向いた。私の姿を見て、とても驚いている。うるたえている。

でも、私を抱き留めてくれた。

レン！ レン！ レン！

以前と変わらない大きな胸。優しいその腕。逢いたかった。逢いたかった。逢いたかったよおっ！

「レン……」

何も言わずに優しく受け止めてくれた。

レン。

大好き。

もう……離れない。

ボロボロになった小さなお店を出て、俺は途方にくれた。

『リンを迎えに行く』

そう決めたものの、いきなり何者かに襲撃されて敵の大きさを目の当たりにすると怯んでしまう。

「まあ、とりあえずはクラブにでも行こうか」

相変わらず爽やかな店長が言った。

え？ クラブ？ なんで？

「差し当たり、雨を凌げる場所にね。お腹も空いたし」

「俺のアパートでもいいんじゃない？」

「何言ってるの？ レン君、リンちゃんに逢う前に死にたい？」

「えええっ？」

随分物騒なことを言う。店長の爽やかな笑顔から発せられた、その遠慮の無い言葉に驚いてしまった。

「襲撃してきたのは多分リンちゃん事務所の関係者だろう。もしかしたらマネージャーの差し金かもしれないね。だったら、君のアパートなんか一番最初にマークされているに決まってるよ」

店長の明るい爽やかな表情と話の内容のギャップがかなり大きくて、その大きさ故に俺は恐怖した。

そうか。俺の敵はそんなに大きいんだ。心してかからないと、返り討ちにあってしまうな。

店長は土砂降りの雨の中、俺を連れて大通りまで出た。

傘を持っていない俺たちはたちまちずぶ濡れになった。濡れながら流しのタクシーを拾う。

「スミマセンねー」

明るい口調で、タクシーのシートを濡らしてしまう非礼を運転手に詫びながら、俺を先に乗せた。

「ちょっと訳アリなんで、言うとおりに走って下さい」

そう言つと運転手に何やら持たせた。あれは迷惑料なんだろうか。タクシーはその後、街の中を三十分ほど迷走して、クラブの近くで止まった。普通に歩くと十分もかからない場所なのに。これも新しい襲撃を防ぐ為なのだろう。

店長と俺は、タクシーを降りた後にクラブの周りを何度も行き来して、そしてようやく中に入った。

「ちよつと待つてて」

そう言つて店長は、入り口に俺を残したまま中に入っていった。

俺がプレイしていた頃とはずいぶん曲調が違う。今はかなりハードなロック調の曲が店内を満たしている。でもダンスブルなことは変わりが無く、店内にいる客たちは思い思いの姿で思い思いのダンスに興じている。

腹に響くベースとドラムの正確無比な重低音。悲鳴のような鮮烈なりフを奏でるギター。煌びやかで華やかなシンセサイザーの音が、DJの煽りの声に混じつて不協和音を繰り返す。

苛烈で激的な光と音の洪水。酔いしれている客。

外の大雨など、ここには関係ない。

俺はふと、そんな客たちを見て羨ましくなった。

店内には、樂しげに踊っている男の子や女の子、カウンターで囁き合っている男女、壁際で睦み合っている男女。あちこちにカップルがいた。

ついこの間まで、自分とリンもそうだったのだ。

でも今は……いない。

その事を強く感じて、何とも言えない寂寥感が俺の心の中を満たす。

今の俺には得られないもの。分かっているさ。でも。

無くさないと分からないなんて、俺はバカだ。人間失格だな。

そう思いながら、でも考え直す。

いや、だからこそ俺は取り戻すって決めたんじゃないか。かけが

えの無いものなんだ。絶対に取り戻す。弱気になっちゃ駄目だ。

「お客様？」

「ひあつ？」

そんな事を考えていると、後ろから声をかけられた。突然の出来事に変な声が出て、思わず照れて苦笑する。

「こちらへどうぞ」

黒い服を着た店員らしき男の子だった。俺に一礼をして、どこかへ案内しようとする。

「え？ いや、でも、あの……」

「お連れ様からのご依頼です。お通しするようにと言いつかっております」

「あ、そう……」

店長か。何を話したのかは知らないけれど、とりあえず落ち着ける場所を見つけたみたいだな。

黒服の店員に案内されて連れてこられたのは、このクラブのVIP席と呼ばれる個室だった。入り口に扉こそ無いけれど、ガラスで仕切られており、一定のスペースがある。

「こちらです」

進められて室内に入り、中であつたソファに腰掛けた。

「何かご入用のものはございませんか？」

「え？」

「お連れ様から言いつかっておりますので。しばらくこちらでお待ち頂くようにと」

「あ、そう……」

店長、どこに行ったんだろう？ 店長の店が襲撃されたということは、店長自身も連中の標的になっているかもしれないのに。

「何もございませんか？ 何かお飲み物でもお持ちしましょうか？」

「ああ、うん。乾いたタオルとおしぼりと熱いコーヒーを貰えるかな」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

そう言って、黒服の店員は出て行った。

手持ち無沙汰な俺は、VIP席からフロアを覗いてみた。少し離れたところで何やら騒ぎが起こっているらしい。

まあ、こんなクラブでは良くある事だ。あまり気にすることでもない。店長の店を襲った連中も、まさかこんなところでは仕掛けてこないだろうし。

俺は改めてソファに腰を下ろした。

さっきの襲撃された光景を思い出す。

連中はマシンガンを使ってきた。あれだけ派手にやったのに警察は来なかった。店長も呼ばなかった。それはつまり、警察を呼んでも意味が無いということだ。これはかなり相手が巨大だということを示してはいないだろうか？

事件を起こしても揉み消す事が出来る。それだけの力を持った連中。

リンの事務所が業界でかなり力を持っていることは、あの週刊誌にも書かれていたし、何より俺自身があの時感じた。

あのマネージャーの高圧的な態度。笑顔は装っていても全く笑っていないかった鋭い目。

それだけの後ろ盾があれば、どんなことだって出来るだろう。今夜の事だって、きつと闇から闇へ葬り去られるに違いない。

『何か歌が売れなくなるような問題を起こしたら……お払い箱だ』
店長の言葉が、俺の頭の中で繰り返す。

リン……。気をつけてくれ。

俺は願った。

俺が見つけて連れ戻すまで、頼むから大人しくしていてくれ。

俺が頭を抱え、どうしても浮かんでくる悪いイメージを頭の中から払拭しようとしていると……。

「レンっ！」

久しく聞いていなかった懐かしい声が聞こえた。

ま、まさか？

頭を上げると、そこには……。

眩いばかりのプラチナブロード。透けるように白い肌。長い睫。大きな碧い瞳。形の良い魅力的な桜色のくちびる。そして伸びやかな肢体。

もう逢えないと思っていた、俺の天使。俺の夢。俺の希望。

その天使は、VIP席の入り口から文字通り飛んできた。俺の腕の中へ飛び込んできた。受け止めて抱き締める。

ああ。

何も変わっていない。

華奢な肩。細い腰。柔らかい肌。そのぬくもり。その暖かさ。

「レン……」

そしてその甘い声。

リンが。

鏡音リンが。

俺の腕の中にいた。

抱き締める腕に力がこもる。

リンの顔が俺の右肩に触れた。

右肩が濡れた。

リンの頬は暖かいもので濡れていた。

7 レン

俺の胸に飛び込んできたリンは、暫くそのまましがみついて泣きじゃくった。

俺は、突然消えたこと、今まで逢えなかった事、俺の気持ち、全て告げた。

それを聞いて、絶対に怒ると思っていた。

リンは一人で頑張ってきた。俺はその間……何も出来ずにただ逃げ回っていた。

そんな卑怯な俺に、リンを想う資格なんか無い。

でも、逢いたかった。死ぬほど逢いたかった。逢えるのなら死んでもいいとさえ思った。

そんな自分が自分で嫌になって、自分を罰するためにピアスを入れたことも告げた。

リンは静かに俺の言葉を聞いてくれた。そして俺を許してくれた。涙を流しながら、俺のピアスマみれの両耳を撫でる。

「そのピアス、素敵ね。良く似合っているわ」

そう言っ、微笑みながら俺の懺悔の証にくちびるを寄せてくれた。

もう離さない。

もう二度と離れない。

固く心に誓う。

俺はリンの手を取った。そのままその手の甲に口をつける。

「お姫様、お待たせしました。もう二度とお傍を離れません」

少しふざけて言う。真面目な顔をして言うには照れ臭い。でも、偽らざる本音だ。

「待ちくたびれたわ。二度目は許しませんからね」

リンも同じように返してくれた。お姫様然とした演技がとても上手い。さすがだ。

手を握る。両手で固く握り締める。リンも両手で握り返してくれた。

見つめあう。

それだけで、もう言葉は要らなかった。

「あーごほん、ごほん」

わざとらしい咳をして、店長が俺たちの注意を引く。

「そろそろいいかな。お互い分かり合ったところで、今後の話だ」

「あ、はい」

俺たちは真つ赤になって慌てて手を離し、店長の方へ向き直った。「マネージャーがリンちゃんをここに寄越したということは、何か企んでいるに違いない。きっと僕の店が襲撃されたのも、その一環なんだと思う」

店長が真顔で言った。横に座ったメイコさんもうんうんと頷く。

「でもそれじゃ、ここも危なくなるんじゃない……」

俺が言うと、即座にメイコさんが答えた。

「まあ、これだけのお客さんがいる中で騒ぎを起こせるほど恥知らずではないと思うけどね」

「でも……」

不安げにリンが言う。

「あの女はそういう女です。自分の邪魔になるものを排除するためだったら何でもする」

「そうだろうな」

店長が場違いなほど明るく言った。

「なんせ、僕の店を蜂の巣の巣にすることに何の躊躇も無いんだ。どうせ何をやっても揉み消せるくらいの後ろ盾はあるんだろうし、またそうじゃないとあんな手段は取れない」

「じゃあ……」

「そう。ここも安全ではないってことだ。メイコさんにも迷惑をかけてしまうな」

店長は心底申し訳なさそうにメイコさんを見た。

その言葉は、そのまま俺たちにも向けられたものだとは自覚する。俺たちのために、これ以上二人を巻き込むわけにはいかない。事と次第によつては命にまで係わるかもしれない相手が敵なのだ。「何言ってるのよ？ 水臭いわね！ あなたと私の仲じゃない」メイコさんが店長を叱責する。明るい口調で。でも怒つたような表情で。

「店長、メイコさん。もうこれ以上は……」

俺たちのために、二人にそんな危険な事はして欲しくない。そう思つて俺が口を開くと、メイコさんがそれを遮つた。

「今の私の言葉、聞かなかつたの？ 水臭いつて言つたのよ？ 私、あなた達も同じよ。子供のクセに生意気言つんじゃないわよ」

その怒つたような口調のまま、俺を窘めるメイコさん。

「それに、ね。レン君。僕たちは少々係わり過ぎた。もう君たちだけの問題じゃない」

「店長……」

俺が絶望的な顔をして店長とメイコさんを見ると、二人は笑顔で応えてくれた。

「僕の店を弁償して貰わないといけないしね」

「所属事務所のアーティストを保護しているのよ？ 謝礼くらいは頂きたいわ」

二人の冗談が嬉しかった。力強い味方を得て、俺とリンは二人で喜んだ。VIP席に笑い声が響き渡つたその時。

「弁償？ 謝礼？ 何のことかしら？」

険を含んだハスキーな声が、部屋の中に響いた。

俺たちは即座に振り返り、入り口を見る。全員の顔色が変わつた。そこには……すらりと背の高いストレートロングヘアの女性が立っていた。ロングのタイトスカートのスリットから形の良い長い脚を覗かせて。豊かな胸の前でしなやかな腕を組んで。冷やかな目でこちらを見下ろしている。

その猛禽類のような冷たく鋭い瞳は、吸い込まれそうなほどに蒼

く美しい。見つめられると魂を取られてしまいそうだ。

またその真つ赤なルージユの引かれた形の良いくちびるから発せられる言葉は、信じられないほどに冷たい。でもその声色はまるで音の女神の歌声のように美しく、それを聞くものを一瞬で魅了する。メイコさんも美しいが、彼女を太陽とするならば、この女性は月ルナティックの言葉の通り、その姿を見た者を虜にし狂わせてしまうような危険な魅力に満ち溢れている。

「あなた……どうして……」

リンが憎々しげに問いかける。

「私がリンにここの場所を教えてあげたんじゃない。何、言ってるの？」
そう。

この月の女神の化身のような女性こそ、リンのマナージャー。俺とリンを引き離れた張本人。

リンが身を固くして俺にしがみつく。何があっても離れないというように。

「あらあら、どうしたの？ リンちゃん？ お迎えに来たのよ？」

彼女の優しげな声がリンの耳に届く。

「こんなところにいたら、あなたまで駄目になってしまっわ。さあ、帰るわよ」

「嫌よ！」

「何を言っているのかしら。あなた、自分の立場、分かっているでしょ？ あなたは私の商品なのよ？」

「嫌よ！ 嫌！ もうあなたとは一緒にいたくない！」

リンが絶叫する。そんなリンを、俺は必死で抱き締めていた。

「そう……。じゃあ仕方ないわね。今度はあんなお店ぐらいじゃ済まないかもしれないけれど……」

心底残念そうな声色でそう言った彼女の言葉を聞いて。

「えっ？」

俺は耳を疑った。

「なんだって？ 店長の店がどうしたって？」

「あら、レン君じゃない。お久しぶりね」

彼女は、まるで今初めて気づいたとでもいうように、俺のほうに目を向けて蕩けるような笑顔で言った。

「答える！ 店長の店を襲ったのはお前の差し金か？」

怒りがこみ上げてくる。本来店長は関係ないはずだ。俺が邪魔なだけじゃないか。それなのに、無関係の店長まで巻き込むなんて……。

「まあ、人聞きの悪い。犯罪者のお店の一つや二つ、強制撤去されても文句は言えないでしょ？」

艶然と晒す月の化身。俺たちを嘲るその冷たい笑顔が途方もなく美しく、俺はその強烈な魅力に恐怖した。

「犯罪者、だって？」

「そうだよ、レン君。君たちはまだ未成年だ。未成年にタトゥーは施術出来ない」

店長が苦々しい顔で答える。

な……。

激しい衝撃が俺の全身を突き抜けた。

そんな……。

じゃあ、俺は……俺たちは……。

知らないうちに店長を犯罪者にしてしまっていたというのか！

「ほら、御覧なさい。そんな法律も守れないような人間のいるところに、大事な商品を預けておけないわ」

愕然とする俺を尻目に、彼女は勝ち誇ったような表情で言う。

「さあ、リン。帰るわよ。あなたが帰る場所だと思っっているところは、こんなろくでもない連中の吹き溜まりなの。近い将来、世界の頂点に立つあなたがいるべき場所ではないわ」

「嫌！ 絶対、嫌！ 私、もうレンと離れないっ！」

泣き叫ぶリン。

「そう……。じゃあ仕方ないわね」

彼女はそう言って、懐から何かを取り出した。

それは……。

「契約書よ。リン、あなたを契約不履行で訴えるわ。そしてその店長さんも警察に通報しといてあげる。私の力があれば執行猶予なんて手緩いことにはならない。実刑つてどのくらいになるのかしらね？」

彼女の目が冷たく輝く。

「あ、それとレン君はピアスショップ襲撃の犯人になってもらおうかしら。メイコさんはそれを匿った罪つてところでどう？」

楽しみに語る彼女。

「安心しなさい、リン。あなたを訴えても、あなただけは大事に扱うわ。例えあなたが有罪になって実刑判決が出ても大丈夫。私がちゃんと助けてあげる。身元引受人になつてあげるわ」

彼女がまるで夢を見るように語る。

いや、実際に彼女は夢見ているのだろう。そんな日々を。

そうなれば、リンの帰る場所などどこにも無い。あるのは、彼女の持っている地獄の鳥籠だけだ。

「リン。こいつらを助けられるのはあなただけよ。どうするの？それでもまだ、ここに残るの？」

今、彼女が言ったことは荒唐無稽だけれど、しかし彼女がやるといったら必ず実現してしまうのだろう。そうやって、今まで数多くのライバルたちを葬ってきたに違いない。それが出来たからこそ、今のリンがあるのだ。

彼女はやる。絶対に。

そう思うと、俺は彼女の言葉を笑い飛ばすことなど出来なかった。それをすれば、俺たちだけではなくて店長やメイコさんまで迷惑がかかる。

どうする？ どうする？

考えるまでも無い。

どうすることも出来ない。

俺は自分の無力さが悔しかった。
俺は……リンを助きたい。
そのためなら何でもする。
そのためなら……。

「リン。こいつらを助けられるのはあなただけよ。どうするの？
それでもまだ、ここに残るの？」

絶望的な質問をするマネージャーを見て、私は何も言えなかった。
私が嫌だと言えば、レンはおるか店長やメイコさんにも迷惑をか
けてしまう。彼女に逆らって、文字通り消えていった人間を實際に
この目で何人も見ている。

レンを、みんなを、そんな目にあわせる訳にはいかない。

「私は……」

言いかけて、気づいた。

私の手を、レンが強く握り締めていることを。痛いほど強く握り
締めていることを。

ここにはレンがいる。

私にとって何物にも代えがたい唯一の存在。
そうだった。

私は他には何もいらなかった。レンさえ傍にいてくれれば。
横に座っているレンを見る。

何も出来ない弱い自分に憤っている表情。泣き出しそうな、でも
強い意志を感じさせるその顔。その瞳。

大丈夫。

きつと大丈夫だ。

二人でいれば、何も怖いものは無い。

「さようなら、ルカ。私はここに残る。訴訟を起こしたかったら起
こせばいいわ。そんなことで私たちは揺るがない」

私は初めて彼女を名前で呼んだ。

その名を呼ばれ、絶対の自信のあった自身の提案を否定された彼
女は、あまりにも美しいその姿を震わせながらも、その怒りの激し
さからか、より壮絶な美しさを放っていた。

「なんですって?」

有り得ない、とルカの顔が言っている。

そんなことは有り得ない。私の提案が断られるなんて、絶対に有り得ない。

怒りに歪む彼女の顔は、そんな彼女の思いを如実に表している。

「そんなことを言っているのかしら? リン? あなたも知っているはずよ? 私を怒らせるとどうなるか」

「知っているわ」

「ならどうして? 私は、あなたが戻ってきたらこいつらを助けると言っておいているのよ?」

「あなたに助けてもらわなくて結構よ。私たちは自分の力で生きる。ルカの助けはいらない」

優しく懐柔するような口調のルカを、私はきっぱりと否定した。

その言葉を口にした瞬間、私の中で何か吹っ切れたような気がした。

顔を上げる。ルカをまっすぐに見る。

きっと今の私の目は、何も濁りの無いすっきりとした瞳をしているだろう。

私の固い決心に驚いたのか、ルカが私を非難するような問いを投げかけてくる。

「歌はどうするの? あなたの大勢のファンはどうするの? CDは? ライブは? 途中で全部投げ出すの?」

「いいえ。全部きちんとするわ。そして説明する。きっとみんなも分かってくれるわ」

「そんな事、私がさせると思っているの?」

ふふんと鼻を鳴らすルカ。

「させてくれるわ。ルカならきっと」

「何故そう思うのよ?」

「だって、ルカは私を認めてくれた人よ。本当は歌が大好きなんだって、私、知っているから」

「な……」

私が笑顔で言うと、ルカが絶句した。あれだけ冷たいと思っていた顔がみるみるうちに赤く染まる。

「ルカの声、すごく素敵だわ。どうして自分で歌わないのか、不思議に思っていたのよ」

「……黙りなさい」

「そうよ。ルカも一緒に歌えばいいんだわ。そうすれば……」

「黙りなさいっ！」

ルカの声がVIP席に響いた。その声は、フロアの喧騒に負けな
いほど大きかった。

「何を言っているの？ 男一人じゃ物足りなくて、犯罪者やその連
れの女まで巻き込んでおきながら、今度は私？ ふざけないで。私
そんなに安くないわ！」

烈火のごとく言葉を吐き出すルカ。私は彼女の逆鱗に触れてしま
つたらしい。

「馬鹿なことを言ってるんじゃないわよ！ あなた一人で何が出来
るの？ そのの、あなたが味方だと思っている連中にしてもそう。
そんな連中には何の役にも立たない。歌が好きだとか、男が一緒にや
なきゃ嫌だとか、そんな甘っちょろい考えでやっていけるほど、こ
の世界は簡単でも優しくも無いわ！」

ルカの怒りは止まらない。

「私があるあなたのために、どれだけのことをしてきたか、あなただっ
て知っているでしょう？ そうよ。それだけのことをしないと、こ
の世界では生き残っていけない。あの『緑の女王』には勝てない。
それほどこの世界は厳しいのよ」

弱肉強食。正にその言葉がぴったりだ。彼女はずっとその世界に
身を投じてきた。綺麗なことも、汚いことも、全て彼女がやってき
てくれたのだ。

全て私のために。

「あなたを見つけたとき、私の心は高鳴ったわ。その愛らしく美し

い容姿。その誰をも惹きつける美しく迫力のある歌声。あの『緑の女王』にさえ引けを取らない。あなたは素晴らしい。鏡音リンは完璧だった」

うつとりとした表情で話すルカ。

「そんなあなたを愛しく思わないなんて人間として失格。私はどんなことをしても、あなたを成功させたかった。世の人間たちに、こんな素晴らしい天使がいることを知らしめたかったのよ」

でも、と我に返り、レンを冷たく睨みつける。

「あんな下劣なものを入れてしまった」

これほどまでに激しい憎悪が込められたルカの声を、私は今まで聞いたことがない。

怒り？ いや違う。

悲しみなんだ。絶望なんだ。

ルカのその激しい言葉を聞いたとき、店長が悲しそうな顔をした。タトウーが下劣だと言われたからじゃない。彼女の気持ちも理解出来るからこそ、店長は悲しかったのだと思う。同じような表情は、ずっと静かに話を聞いていたメイコさんも同様だった。

今なら私にも分かる。きっとレンもそうだろう。

「あんなもの、この世界で生き残るには障害でしかない。どんなに容姿が素晴らしくても、どんなに歌声が素晴らしくても、あんなものが入っていたんじゃ認めてもらえない」

そう。

入れた本人たちはそれでいいかもしれない。でも、現実になんかそれを忌み嫌う人たちがいるのだ。社会に出た時、それがもたらすマイナスは枚挙に暇が無い。

私もそれを実感していた。だから彼女の悲しみが理解出来るのだ。「私は許せなかった！ それを入れさせて、天使を貶めたレン君が許せなかったのよ！」

彼女は激しく叫んだ。その言葉を聞いたレンが呆然としている。その事にはレンも既に気づいていたのだろう。しかし改めてはっ

きりと、目の前で憎悪にまみれた激しい言葉で非難されると、そのシヨックは大きいようだ。顔が真っ青になっている。でも。

それは違う。

私たちは二人で生きていこうと決めた。その証として入れたタトゥーだ。どこに出しても恥ずかしくない、私たちの想いがそこには込められている。

それが認められないというのであれば、それは私たちの生き方を否定しているようなものだ。本当に私のことを想っていてくれるのであれば、認めてくれなくちゃいけない。

「そうね。そう思って、私も入れてみたわ」
ルカが右の袖を捲った。

そこには……。

私と同じ紫色の蝶がいた。

「まさ……か……」
私はもちろん、レンも、店長も、メイコさんも、その衝撃の光景に言葉を失った。

彼女の美しく透き通る白い右肩に、その可憐な蝶は静かに羽を拡げてとまっていた。

私と同じ？ いや違う。

よく似てはいるけれど、少し違う。何よりその蝶には、羽の部分に巧妙に隠してはあるものの、飾り文字によってある人の名前が彫られていたのだ。

曰く。

『R i n n と。』

ルカと呼ばれたリンのマナージャーの右肩に紫の蝶がとまっているのを見たとき、俺は不思議と納得が出来た。

確かに驚いた。あれだけタトウーに対して厳しい見方をしていたルカだ。まさか実践するなんて思いもしない。でも。

それでも俺は、彼女の行動に納得が出来た。

彼女は彼女なりに、一生懸命にリンを理解しようとしていたのだと分かるからだ。

一見悪魔の所業のようなリンとの契約も、もしかしたら彼女が考えた『緑の女王に勝つ』為の最良の手段だったのかもしれない。

彼女は本当にリンを日本一、いや世界一の歌姫にしたかったのだ。俺は今や、彼女に対して悪感情が持てなくなっていた。

彼女の目は本気だ。俺と同じように、本気でリンを心配している。本気でリンを……愛している。

そうでなければ、あんな厳しいことは言えない。

そうでなければ、何の覚悟もなく名前入りのタトウーなんて入れられるわけが無い。

そうでなければ……あんな手段まで用いて、リンの邪魔になるものを排除出来ない。

一連の行動は、全て彼女のリンに対する想いの深さから起こっていることだ。そんな彼女を誰が責められるだろうか。

「やれやれ。何をやっているんですか？ ルカお嬢様」
VIP席にまた違う声が響いた。

ルカの後ろに、見たことの無い男性が立っていた。

かなり長い髪を後ろで結び、その長さが映えるようなすらりと高い細身の身長。黒いスーツ姿が良く似合う。

「あなたは……」

リンが驚いたように呟く。

「何をしているの？ カムイ。店の外で待機していなさいって言ったでしょ？」

ルカが振り返って、その男性を睨みつけている。

カムイと呼ばれた男性は、ルカの言葉には全く関心がないようで、適当に相槌を打つような口振りで言った。口元が薄く歪んでいる。

「いつまで待っても出番はないし、雨はガンガン降るしで、もう待ちくたびれました。会長に報告したら、会長ももういいって仰いましてしね」

「お爺様が？ まさか！」

激しく動揺するルカ。

「はい。伝言です。『もうお前らは用済みだ』だそうで」

「そんなはずはない！ お爺様もリンの実力には惚れ込んでいた。

カムイ、お前まさか……」

「さあて、何のことでしょうね」

カムイの冷たい笑顔から発せられた言葉。

それを聞いたルカの顔からは、完全に血の気が失われている。

俺たちには全く話の内容が掴めない。この二人、いったい何を話しているんだ？

その時。

フロアのほうから爆発音が聞こえた。途絶える音楽。続いて聞こえてきたのは、おそらく客のものだと思われる悲鳴、怒号。そして

……銃声。

「まさか……」

店長とメイコさんが青ざめた。

「貴様、何をした！」

初めて見る店長の激昂した顔。その温厚な爽やかな顔が、今は鬼の形相に変わっている。

そんな店長の声にも全く動じず、カムイは答える。

「ああ、あのお店の店長さんですか。これはこれは、先程は失礼し

ました」

涼しい顔のまま。口の端には笑顔さえ浮かべている。

「いやあ、リンが言う事を聞かないって、常々会長は困っておられましてね。そこにいるマネージャーを使って何とかしたかったんですが、あるうことが逃げられるし。まあ、そこそこ稼がしてもらえたんで、もういいかなってことで処分するように言われているんですよ」

「ウソね！ お爺様はリンの事をとても気に入っていたわ。私に全権を与えてくれたのよ！ これはお前の独断ね？ カムイ！」

ルカが叫ぶ。

ルカにそう問われて、カムイは薄くせせら笑った。

その表情を見て、俺の中で何かが弾けた。

『用済み』？ 『処分』？

リンの夢を。ルカの夢を。食い物にしてぶち壊しておきながら。

それだけでは足りないって言うのか？

「私たちが『処分』って言う時は、関係した全てのものを廃棄するんです。未成年にタトゥーを入れるような犯罪者の店や、そんな馬鹿者が入り浸るような不健全なクラブ、そこに集まるような低脳な連中なんか、この世の中には要りませんよ」

気がつくと、店内は銃声と悲鳴で溢れかえっている。一番奥まったところにあるVIP席にも、その硝煙と血の香りが漂ってきた。

「カムイ！ 止めさせなさい！ 私の助手のくせにこんなことをして、ただで済むと思っているの？」

真つ青な顔のまま、ルカが叫び続ける。

「いいんですよ。この失敗の責任はあなたが取ってくれるので。あなたは実働部隊の連中を抑えきれずに暴発させた。そう言えば私は痛くも痒くも無い。むしろ後始末をつけた私の評価は上がり、暴発を押さえ切れなかったあなたの評価はがた落ちになる」

「それじゃあ……」

「今頃気がついたんですか？ そう。会長も失脚しますね」

「カムイ！ あなた、お爺様に育ててもらった恩を忘れてよくもそんな……」

「あなたがいけないんですよ、ルカお嬢様。いつまでもリンみたいな小娘に熱を上げて、私のことを無視するから……」

粘着質の紫色の瞳。あの瞳の色を俺は知っている。

逢いたくても逢えない。触れたくても触れられない。焦がれて焦がれて、そしてなお自分のものには決してならない焦燥感。絶望感。あれは……あの色は、嫉妬の炎の色。

恋の狂気かられた一人の男の哀れな姿。まるで少し前の俺のよう……。

店内からまた爆発音が聞こえた。絶え間なく店内に響く阿鼻叫喚の悲鳴。黒い煙に包まれた店内は、きつと地獄絵図のようになっていくに違いない。

怒りで気が狂いそうになる。

まさか、イベント中で観客がこった返しているクラブを襲撃するなんて。

普通なら考えられない。

俺の腕に掴まりながら、がくがくと震えているリン。

同じく怒りで真っ赤になっている店長とメイコさん。

絶望した表情で立ち尽くしているルカ。

ここにいる全員が、有り得ない光景に愕然としていた。

「じゃあ、そういう訳ですの」

そう言っただけカムイはスーツの内側から何かを取り出した。

鈍く光る黒い塊。それは……。

「危ないっ！」

カムイの傍に立っていたルカが、咄嗟にカムイに飛びついた。

何か小さな音が聞こえたような気がした。周囲の悲鳴にかき消されてその音自体は聞こえなかったはずなのに、俺にははっきりと聞こえた。

それは……銃声。

よろけてカムイに倒れ掛かるルカ。カムイはそんな彼女を跳ね除けた。

跳ね飛ばされ、床に倒れたルカの豊かな左胸の辺りに、赤い華が咲いていた。

みるみるうちに大きく開く赤い華。気がつくと、倒れたルカの周りには小さな赤い池が出来ている。

「ルカっ！」

震えながらその光景を見ていたリンが、まるで弾かれたようにルカの元へ駆け寄る。

「ごめんなさいね……。あなたの気持ちは……。知っていたのよ……。でも……」

「もういいっ！ もういいからっ！ しゃべらないでっ！」

ぐったりとしたルカを、カムイに背を向け庇う様に抱き上げながら、血の気の無い真っ青な顔をした半狂乱のリンが叫ぶ。その大きな蒼い瞳からは大粒の涙が溢れ、頬を伝っている。

「ふっ……。公私を弁えててなかなかいい仕事振りだったんですねえ。あなたにはいたく御執心でしたから、きつとあなたに抱かれて満足なんじゃないですか？ このレズ女は」

発砲する前後を、まるで同じ感覚でカムイが話す。表情はおろか声色一つ変わらない。

こいつにとつて、かつて愛したルカでさえ、もうどうでもいい存在なのだ。ならば俺や店長、メイコさんは……。

俺は、飛び出したリンの前に出て、カムイとの間に立ち塞がった。カムイの持っている、鈍い光を放つその銃が怖くなかったと言えば嘘になる。

でも、不思議とその時は怖いとは思わなかった。

俺がリンを守る。その想いだけが俺を突き動かしていたからだろう。

反対側に座っていた店長とメイコさんが、遅れてルカとリンの元へやってきた。二人ともルカを抱くリンの傍に駆け寄り、ルカの容

態を確かめる。

「急所は外れているわ。しっかり止血して直ぐに病院へ運べば大丈夫よ」

メイコさんの言葉が頼もしい。辺りのテーブルクロスやソファのカバーなどを干切って懸命に止血しようとしている。

しかし……。

「そんなことをさせるわけにはいきませぬね。お嬢様にはこの失態の責任を取ってもらわなければなりません」

カムイの酷薄な笑顔は変わらない。一発撃って煙を吐いている銃口はこちらを向いたままだ。

「じゃあ、次はレン君。君ですな」

カムイの手が引き金にかかる。

俺の後ろには動けないルカを抱いたリン。そして店長とメイコさん。

ここを譲るわけにはいかない。

「はじめましてがさようならっていうのも残念ですね。お嬢様から話を伺っていて、君とは良い仲間になれそうな気がしていたんですが、ま、そんな女と付き合っているっていう段階でもう運がありませんでしたな」

笑顔のまま、カムイは引き金を引き絞った。

「では、さようなら」

その刹那。

俺の身体が反応していた。

咄嗟に身を屈め、カムイに突進する。

思いも寄らないタックルを受けて、もんどりうって倒れるカムイ。銃口を飛び出した弾丸は狙いを外し、俺の右肩を掠めた。

それが合図だったかのように、ルカを抱きかかえた店長がVIP席を飛び出した。リン、メイコさんがそれに続く。

「なかなか素直に処分されてくれませぬね。これだから馬鹿なゴミ共は困る」

みんながVIP席から出たのを確認して、俺も出ようとしたその時、カムイが立ち上がった。

手に持っていた銃は、さっきのタツクルを受けた時にどこかへ飛ばしてしまっただらう。今は素手だ。

「なかなかいいタツクルでしたが、それじゃ私は倒せませんよ?」

そう言っつて、一瞬で俺との間合いを詰めてきたカムイ。三メートル以上あったはずの俺との距離は一瞬で消えうせ、そのスピードに驚いて立ち尽くしていた俺の腹に強烈な一発を放つ。

「ぐはっ……」

続いて二発。三発。四発。五発。六発。

まるでサンドバックを叩く様に、俺の腹をめがけて放たれる凄まじいボディーブロー。

一発決まる度に俺の身体が宙に浮く。そのまま連打されることによつて、俺の身体は浮いたままだ。足が地に付かない。

一際強い一発の後、蹴りが来た。

文字通り吹っ飛んで、フロアの床に叩きつけられた。あまりの激痛にフロアを転げまわる。

あ、ヤバイ。これはどこか骨が折れたな。腕か? あばらか? 脚か?

殴られすぎた腹の中から胃液が逆流してきて、俺の口から大量に嘔き出していた。

意識が遠くなる。

リンは? ルカは?

そんな朦朧とした意識の中で二人を探す。

視界がぼやけてよく見えない。

体中の激痛を無理矢理我慢して、何とか立とうとする。

早く立たないとカムイの第二陣が来る。同じものを食らったら、もう意識を保ってられない。

俺は立ち上がるうとして、手探りで掴まるものを探す。

その時、何か冷たいものが俺の手に触れた。

「さあて、止めを刺してあげましょうか」
足音が近づく。

ヤツは息一つ切らしていない。
立たなきゃ！ 逃げなきゃ！

頭はそういつて危険信号を発しているが、身体は全然動かない。
手も足も、ぴくりとも動いてはくれなかった。

カムイはゆっくりと俺の傍まで来ると、おもむろに胸倉を掴み、
ぼろきれのようになった俺をぐつと引き上げた。

「楽に殺してあげましょう。首を絞められるのは快感だと聞きます。
無様にイキながら旅立ちなさい」

左手で胸を掴まれ、右手一本で俺の首を絞める。
なんて力だ。

あの華奢な姿からは想像もつかない。

……抵抗……出来……ない……！

薄れていく意識の中、俺は夢中で右手に握り締めた冷たいものを
カムイに向けた。ヤツの腹に当てる。

そして……引き金を引いた。

あれだけ激しく降っていた雨が、いつの間にか優しい小雨に変わっていた。

私とメイコさん、そして撃たれたルカは今、駆けつけた救急車の中にいる。

肩から毛布をかけられ、車内の簡易ベッドに座っている私。

隣には、同じように肩から毛布をかけたメイコさん。二人ともすすで真つ黒だ。

反対側の簡易ベッドにはルカが寝かされている。メイコさんの止血がとても効果的だったらしく、救急隊の隊員が驚いていた。

隊員の言葉によれば、出血がやや多いものの輸血で何とかなららしい。体内に残った銃弾も手術で取り除けるそうだ。

私はほっとした。

幸運にも私もメイコさんもルカと同じ血液型だから、即座に輸血のドナーになることを申し入れた。

とはいえ、さすがに事件現場のここで輸血をするわけにはいかなので、これから病院に搬送される。今はその準備の最中なのだ。

「他のお客さんたちは？」

メイコさんが青い顔をして救急隊員たちに尋ねる。

「大丈夫ですよ。皆さん避難出来たようですし。煙を吸っている人が沢山いますが、みんな軽症です。銃撃戦って聞いて驚いていたんですが、撃たれた人はこの女性だけです。他の人は掠り傷が殆どです」

「そう……ですか……」

ほっとした表情。ずっと張っていた気持ちの糸が切れそうなくらいに疲れ果てた顔をしている。

「……ごめんなさい……」

私の口から、自然とそんな言葉が出た。

「ごめんなさい……。私がここに来たからこんなことに……」
涙が溢れてくる。

私さえルカの言う事を聞いて大人しくしていれば、こんなことにはならなかったのに……。

「違うわよ」

私の肩を抱いたメイコさんが言った。メイコさんは優しい目をしていた。

「あなたは悪くない。ルカも悪くない。そして……きっとカムイも悪くないんだわ……」

「え？」

私は耳を疑った。

ルカが悪くない？ カムイが悪くない？ 私が……悪くない？

「そうよ。あなたがレンを想うように、ルカはあなたを、カムイはルカを想っているの。みんな大好きな人がいて、その人の傍にいたいと思っただけ。それが叶わないから心が壊れる。気持ちが歪む」
メイコさんは寂しそうに続けた。

「気持ちが伝わらないって、とても辛い事よ。人間は直ぐに簡単に壊れてしまうわ。壊れた拳句、大好きなはずの相手を傷つけてしま……う……」

メイコさんが立った。反対側の簡易ベッドで横になっているルカの枕元に座り、彼女の頬を撫でる。優しい彼女の瞳が、より一層優しくなっている。

「あなただつて、本当はこんな形での再会なんて望んでいなかったはずよね、ルカ？」

「姉さん……」

ルカがメイコさんを『お姉さん』と呼んだ？ 私はビククリして二の句が継げなかった。

そうか。

あの時、ルカは紹介していないはずのメイコさんの名前を呼んでいた。あの時は動転していたから気がつかなかったけれど、そうだ

「つたんだ……。」

ルカの頬を優しく撫でるメイコさんの目には涙が浮かんでいる。その姿を見上げるルカの目にも、光るものが輝いていた。

二人の間に言葉は無い。でも、確実に心は繋がっている。いいな。

絆って、こういうものなんだ。きつと。

「お待たせしました。病院側とも連絡がついたので、出発します」
救急隊員が声をかけてきた。

「輸血用の血液のドナーになっていただけなのは……えーと？」

「私です」

「ずい、とメイコさんが歩み出た。

「あ、私も……」

「リンちゃんはこちらに残りなさい」

「厳しい口調でメイコさんが告げた。

「えっ？ ど、どうして？」

「どうしてじゃないわよ。あなたはここでレン君を待っていないければいけないでしょ？ あの炎の中へレン君を迎えにいったバカにも、私が病院に行つたつて伝えてもらわないといけないしね」

「そうなのだ。」

店長は、私たちを黒煙で満たされた店内から連れ出した後、レンを助けるといつて消防隊員の制止を振り切つて、また地下のクラブへと舞い戻つていったのだった。

私たちのいる救急車の周りには、無数の消防車が集まっている。緊急を示す赤い回転灯の光が辺り一面を真っ赤に染め上げていて、その事件の大きさを物語っていた。

地下のクラブから出火したとはいえ、今やその炎はビル全体を覆い尽くし、窓と言う窓から激しい黒煙を噴き出している。いくつかの高層階の窓からは紅蓮の悪魔がその姿を現している。そんな地獄へ、店長は戻つて行つたのだ。

「は……い……。分かりました」

正直、怖かった。

一緒に病院へ行きたかった。

それは逃げかもしれない。そんなことは分かっている。でも。

ここで一人で待つのはとても怖い。

もうレンとは逢えないかもしれないという恐怖が、絶え間なく私の心を責め苛むから。

そう。

今度は、永遠の別れになるかもしれない。

それは想像でも予想でもなくて……確信。

私が最後にレンを見た時、あの混乱した店内でカムイと対決をしていた。私たちを逃がすために。

カムイは強かった。レンなんかまるで子供扱いだった。

圧倒的な力の差。絶望的な差だ。勝てるわけが無い。

レン……。

今頃は……。

私がそう覚悟をしたとき。

「大丈夫……よ……」

「ルカ？」

息も絶え絶えに、ルカが私に話しかけてきた。

ルカには麻酔がかけられているらしい。意識が朦朧としているようだ。なのに、私の顔を見てはつきりと力強く言う。

「レン君は……絶対帰ってくるわ……」

「どうしてそんなことが分かるの？」

泣きそうな顔をして、いや、泣きながら私は訊ねた。

ルカは弱々しく、そして少し悲しそうに微笑んで言った。

「信じなさい……。あなたと彼との絆を……。あなた達の……。紫の蝶を……」

「絆……？」

「そうよ……。あなたとレン君の絆……。私があなたに望んだもの

……。得られなかったもの……。そんな弱いものじゃ……。ないはずだわ……」

そうだった。

私が信じなくてどうする？

誰が信じなくても、私が信じないでどうするんだ！

私のバカ！ バカ！ バカ！ バカ！

何を弱気になってるんだ！ 私！

レンは絶対に帰ってくる。

私を置いて、どこにも行きはしない！

「そうね。私とレンの絆は、あなたやカムイに勝ったんだもんね。

絶対レンは帰ってくるわ！」

そう言くと、その声を聞いて安心したのか、儂げに微笑んでいたル力がぐったりとして目を閉じた。意識が無くなった。眠ったようだった。

「では、病院へ出発します」

そう言われて私が救急車を降りたその時。

少し離れたところで消火活動をしている消防隊員のところでどよめきが起こった。

「放水、少し間を開ける！」

「救急隊！ 早く！」

大声で呼ばれた他の救急車の隊員が、慌ててストレッチャーを押して駆け出した。他の隊員もその後を追う。

何かあった？

もしかして……。

「行きなさい」

メイコさんが言ってくれた。笑顔で送り出してくれた。

「はいっ！」

私は駆け出した。

早く、早くあの声のするところへ行きたい。

走った。走った。

疲れているからなのか、怖いからなのか。脚が上手く運ばない。辺り一面に張り巡らされた消火用のホースが邪魔で何度も何度も転びそうになって、ようやく隊員達が集まっているその場所へ辿り着いた。

わらわらと集まっている消防士や救急隊員を押しつけて、何とか一番前が出る。

そこには……！

巻き上がる炎と黒煙の中、ボロボロになったレンが店長と二人で真ん中にぐったりとしたカムイを肩で抱えて歩いていた。

クラブのあった地下から上がっている階段を、倒れそうになりながらも一段一段踏みしめるように歩いている。

耐火服を着た消防士たちが駆け寄る。たちまち三人は六人になり九人になって、歩くスピードは格段に早くなった。

「レンっ！」

私はたまらず飛び出していた。

部外者立入禁止のテープで囲まれていたけれど、そんなことは知らない。

ボロボロのレンに向かって走り出す。

「レンっ！」

私の声が聞こえなかったのだろう。目の前に立って初めて私に気づいたらしいレンが驚いている。

「ただいま……リン」

「おかえり……レン」

私を見て緊張の糸が切れたのか、辛うじてそれだけ口にして私に倒れ込むレン。そんな彼を、私は全身全霊で受け止めた。

ああ、私と同じ、あの綺麗なプラチナブロンズがすすだらけだ。顔も身体も痣だらけ。服はボロボロ。極度の疲労の所為で、いつもの透き通った蒼い瞳には生気が無い。脚を引き摺っているのは、どこか痛めたからだろうか。右肩のタトゥーの真ん中に大きな傷があつて、真っ二つに裂けた紫色の蝶から真っ赤な血が滲んでいた。

でも。

レンが。

無事に。

生きて。

私の元へ。

帰ってきてくれた。

もう、それ以上の何を望むというのだろう。

私はそんなボロボロのレンの、その痣だらけで腫れ上がっている頬を両手で包んだ。そのまま目を閉じて顔を寄せる。

触れる優しい感触。ちよつとだけ血の味がする。

『私たちは、どんなことがあっても絶対に離れないんだよ……』

私たちの右肩にとまっている紫の蝶が、そう言っているような気がした。

そうだ。

そうだよ。

私たちは絶対に離れない。

蝶々さん、そうだよね？

きつとそうだ。

だから、私たちはこれから二人で生きていく。

これからもよろしくね。

ずっとずっとよろしくね。

フラフラのレンが頷いたような気がした。

二人の右肩の蝶が微笑んだような気がした。

エピソード1 ルカ

気がつくとも病院にいた。

「あ、気づかれませんでした？ 今、ご家族の方を呼びますね」
病室にいた看護師がそう言った。

家族？

私に家族なんていない。

誰がいるんだろう？ お爺様？ もしかして……リン？
いや、まさか。

あれだけのことをされて、私の元に帰ってくるはずがない。

私は自分の愚かな行いで、自分の最も大切な人を決定的に失ったのだ。

強烈な寂寥感が、絶望と共に私の心を支配する。
でも。

不思議と涙は出なかった。

私が酷薄な女だということではない。何となく、そんな予感があったからだ。

振り返ってみれば、私はリンを何とかして私のほうに向かせようと躍起になっていた。

勿論そのずば抜けた才能は素晴らしかった。

でも、私にとってそんな彼女の才能は、本当はどうでも良かったのだ。

あの娘が欲しい。他に渡したくない。

私は初めて会ったあの日から、彼女に恋をしていたのだから。

それが一方通行なものだということも、最初から気がついていて、彼女には彼氏がいて、とても幸せそうだったから。

私にはそれが許せなかった。

何故？ どうしてそんなつまらない男がいいのよ？ 男なんて、みんな下らない存在だわ。

私は彼女から彼を引き離すことにした。幸い同じようにボーカリストを目指している彼は、私のそんな下心にも気がつかずに、すっかり騙されてくれた。

彼もなかなかの実力があつた。彼女と二人でデュエットさせるとこれは！ という表現をする。二人で一つのユニットとして売り出しても、きつと上手くいっただろう。

でも、彼女を私のものにするには邪魔だ。

そして計画通り、彼は去り、私はリンを手に入れた。手に入れた以上は他に渡したくない。いつまでも傍に置いておきたい。

そう思った私は、彼女に過酷な契約を結ばせ、彼女を縛りつけることにした。またそれぐらい精力的な活動をしないと、全盛を誇る『緑の女王』には勝てないからだ。

私は彼女に恋をしたが、彼女の実力を見誤った訳ではない。彼女は素晴らしい。それは間違いない。

だから、彼女の魅力を他の人にも知って欲しかった。女王に負けない、いやそれを凌駕する素晴らしい彼女の魅力を。

そして『売れる』ことで彼女に幸せになって欲しかった。私や姉さんのようではなく、成功することによって歌うことの素晴らしさを味わって欲しかったのだ。

「気がついたみたいね」
誰かの声が聞こえた。

身体が言うことを聞いてくれない。何とか頭だけ動かして入り口を見る。

そこにいたのは……メイコ姉さんだった。青い顔をして立っている。

「入っていい？」
「……」

私は答えなかった。

いつたいどんな顔をして彼女に会えばいいのだろう。

私が答えないと、姉さんはそのまま病室に入ってきた。ベッドの傍にあつた椅子に腰掛ける。

彼女はメイコ。たつた一人の……私の姉。

私たちはお爺様の主催する事務所に所属していた元ボーカリストの姉妹。実の姉妹だ。姉さんが先にデビューし、私が遅れてデビューした。

当時、お爺様の事務所はまだ開設して間がなく、業界内の力も今程は無く、私たち二人を売り出すのに苦戦していた。

そのうち、姉さんは私の売り出しに事務所の総力を挙げるために引退を迫られた。弱小プロダクションなら良くある事だ。実際、その時点で姉さんにはヒットらしいヒットが無かった。

実力では誰にも負けない。でも売れない。その現実には私は絶望した。

姉さんは何も言わずに受け入れた。

同時に、お爺様の事務所も辞めた。その後の行方は分からなかった。すぐ近くにいて私に負担をかけたくなかつたんだと思う。

姉さんだって、もっと歌いたかったに違いない。

私は悔しかった。一緒の土俵で姉さんと勝負したかったからだ。

姉さんが引退してしばらくして、私はブレイクした。一斉を風靡した、と言つてもいいと思う。弱小だったお爺様の事務所は、一気に業界最大手と呼ばれるまでに成長した。

でも。

私の中ではいつも葛藤があつた。

私の成功は、姉さんの犠牲の上に成り立っている。

私の実力は、姉さんと比べてどうだろう？

みんな、どう思っているのだろうか？

姉さんと比べて、私のほうが優れているところなんてある？

みんなの顔が怖かった。

みんなの耳が怖かった。

みんなの声が怖かった。

私はだんだんと歌えなくなっていくた。

その頃、彗星のように現れたアイドルがいた。『緑の女王、初音ミク』だ。

彼女は確かに素晴らしかった。

その容姿、その歌声。

清純な彼女の魅力はたちまち世界を席巻した。同じ事務所にも所属している私さえ、彼女には叶わなかった。彼女は、事務所の中までも、その魅力で彼女の色一色に染め上げてしまったのだった。

気がつくと、あれだけ売っていた私も鳴かず飛ばずになり、引退に追い込まれていた。

そんな私が。

姉さんを追い出し、踏み台にしてまで勝ち取った立場を、後輩に易々と奪われてしまうような、そんな情けない私が、一体どんな顔をして姉さんに会えるというのだろうか。

「良かった。手術も上手くいったみたいね」

「手術？」

「覚えてないの？ あなた、私のお店でカムイとかいう男に撃たれたのよ」

そうだった。

お爺様は、引退した私に後進の育成を依頼してきた。同じ事務所の後輩『初音ミク』に引退に追い込まれた私に対して、おそらくお爺様に出来た唯一の罪滅ぼしだったのだろう。

私はそれを受け入れた。カムイは、その時お爺様が付けてくれた助手。彼も元々はお爺様の事務所所属のボーカリストだった。そこそこ売れたけれど、そこまでだった男だ。

私は子供の頃から男性には嫌悪感を抱いていたので、お爺様の申し入れは有難い反面、嬉しくなかった。でも、確かに助手は必要だったし、彼は優秀だった。

星の数ほどのアーティストのタマゴたちを見て、そして私は出会ったのだ。

鏡音リン。

地上に残された最後の天使。

私は彼女に夢中になった。

私は年下の彼女に本気の恋をしてしまったのだ。

カムイが私に気があるらしいことは、もう随分前から気がついていた。

でも、私は男は受け入れられない。だから殊更辛く当たった。そうすれば私のことを諦めてくれると思ったのだ。

まさか、あそこまで思い詰めているなんて……。

「カムイは？」

「大丈夫。店長とレン君がちゃんと連れてきたわ」

その言葉を聞いて、私は安堵した。

生理的に受け付けられないかもしれないけれど、でも彼は私の部下だし、私も好かれていたことが分かっている。心配しないはずが無い。

「彼、どうなるのかしら……」

「彼、よっぽどあなたのことが大事なのね。全ての責任は自分にある、あなたは関係ないって言い張っているらしいわよ」

「えっ？」

私は耳を疑った。

「店長のお店を襲撃したのも、私のクラブを襲ったのも、全て自分一存だと言っているらしいわ」

「そんな……」

「あなたを守りたいのよ、彼」

私の目に涙が滲んだ。リンを永遠に失ったと思った時に出なかった涙が、何故か今頃溢れてくる。

「元気になったら見舞いにでも行ってあげなさい。ここの五階の病室にいるわ」

「はい……」

頷いた私を満足げに見る姉さん。優しい笑顔が嬉しい。

「……姉さん……顔色が悪いわ……」

私が気になっていたことを訊ねてみた。

「そうね。あなたに結構血を分けてあげたからちよつと辛いかな。私も少し休ませてもらうわ」

そう言つて、姉さんは私の隣にあつた空きベッドに横になった。

「……ねえルカ」

「何？」

「今度、一緒に歌おうか。久しぶりに」

「いいわね……」

その言葉に、肩の荷が下りたような気がした。

「姉さん……」

「何？」

「ごめんなさい……」

「何を謝っているの？ 私はあなたが私の元に帰ってきてくれて嬉しいのよ」

「……ごめんなさい……」

涙が止まらない。

「変な子ね……」

姉さんの声も震えていた。

見上げる病室の白い天井が。

滲んで、歪んで。

もう目を開けていられなかった。

エピソード2 カムイ

気がつくとも病院にいた。

「あ、気づかれませんでした？ 今、ご家族の方を呼びますね」
病室にいた看護師がそう言った。

家族？

私に家族なんていない。

誰がいるんだろう？ 会長？ もしかして……お嬢様？
いや、まさか。

あれだけのことをされて、私の元にやってくるはずがない。

私は自分の愚かな行いで、自分の最も大切な人を決定的に失ったのだ。

強烈な寂寥感が、絶望と共に私の心を支配する。

でも。

不思議と涙は出なかった。

私が酷薄な男だということではない。何となく、そんな予感があったからだ。

振り返ってみれば、私はお嬢様を何とかして私のほうに向かせようと躍起になっていた。

彼女はボーカリストとしてもマネージャーとしても、その才能は非常に素晴らしい。

でも、私にとってそんな彼女の才能は、本当はどうでも良かったのだ。

彼女が欲しい。他に渡したくない。

私は初めて会ったあの日から、彼女に恋をしていたのだから。

それが一方通行なものだということも、最初から気がついていて、彼女には好きな女性がいて、男性には目もくれないでいたから。

そう。彼女は同性愛者だ。一緒に仕事をするようになって、それは直ぐに気がついた。男性の私に対する当たり方が、他の女性のそ

れとは決定的に違うからだ。

彼女は仕事にはとても厳しい。それは女性も男性も関係ない。ただ決定的に違うのは、仕事を終えた時。何気ない会話でさえ、相手が男性だと表情が変わった。過去に何があったのかは知らないけれど、これは生理的嫌悪感というやつだ。すぐさまどうにかなるものではない。唯一の例外が会長だろう。会長には普通に接することが出来るようだった。

私は彼女に認めて欲しかった。せめて普通の会話が出来る程度には。

だから、引退後に彼女の補佐を会長から言い付かった時、一心不乱に仕事に専念した。どんな汚い仕事も躊躇わなかった。

全てはお嬢様のため。彼女が喜ぶなら、それで良い。
しかし。

私は次第に我慢が出来なくなっていた。

一向に変わることの無い彼女の視線、姿勢、態度に、私は耐えられなくなってきたのだ。

そんな時、彼女は『金の卵』を見つけた。

鏡音リン。

地上に残された最後の天使。彼女はそう呼んだ。

それは、私から彼女を奪う悪魔に見えた。

確かにリンの實力は素晴らしかった。容姿も申し分なし。私だけが一時期はボーカリストとしてならした人間だ。そのくらいの見る目はある。彼女が惚れ込むその理由も良く分かる。

しかし。

彼女はリンの才能だけではなく、リン自身に恋をしてしまったのだ。

私は絶望した。もう私の方を向くことは絶対がない。そう思った。

ただ、救いはあった。

リンにはレンという彼氏がいたのだ。

リンは同性愛者ではない。彼女の想いを受け入れられない。

もしかしたら、そんなリンに嫌気がさすかもしれない。そう考えた。

でも彼女は、そんな生易しい私の考えを一蹴した。

彼女は邪魔になる彼氏を排除しようと画策した。理由は何でも良かったのだが、ちょうどその頃、彼女を激怒させる決定的な事件が起こった。

右肩の蝶。紫色のタトゥー。

この業界に於いて、正に致命的ともいえる肌への刻印。

リンにはお嬢様への反発心もあったのだろう。レンという彼氏とお揃いのタトゥーを、彼女に無断で入れてしまった。

私は即座に、リンにタトゥーを施術したシヨップを突き止めた。そして彼女に報告をした。

その後のことは……私は関係していないので良く分からない。確かなことは、彼氏は消え、彼女はリンを手中に収めたということだけだ。

「やあ。気がついたようだね」

そのシヨップの店長が、病室の入り口に立っている。

「あなたは……」

「調子はどうだい？ 銃弾は手術で取り除かれたそうだけど」
爽やかな笑顔をこちらに向けて、彼は中へ入ってきた。

「無事で良かった」

何が良かったというのだろう。

私は全てを失ってしまった。仕事も。彼女も。

それは確かに自分の所為かもしれない。けれど、それを自分だけの所為にするには、少しばかり辛過ぎた。

「お嬢様は？」

「大丈夫。ここの三階に入院している。君に撃たれた怪我も大したことはないらしいよ」

私はほっとした。

「君を連れてくるのは骨が折れたよ。君、案外重たいんだな」

店長がそんなことを言った。
そうか。

私は、あの時リンの彼氏と対決して……撃たれて……。
「そうだよ。それでもまだレン君を殴っていた。本当に強いな、君は」

「そんなことはありません。私は好きな女性一人手に入れられなかった。まして……この手にかけてしまうなどと……愚かなことを……」

今なら、自分がどれだけ愚かだったか、良く分かる。

どれだけ頑張っても思いが伝わらないことへの苛立ち。歯痒さ。

そして……絶望。

あの時の私は、心が壊れていた。

「実は君に相談があつて来たんだ」

爽やかな笑顔のまま、店長が私の耳元に近づいてきた。

「今回の騒動、少し大きくなり過ぎたね。きっと君のところの会長でも揉み消す事は出来ないだろう。誰か責任を取る人間がいる。君にそれをやってもらいたい」

この男、見かけによらず策士だな。私が薄く微笑むと、我が意を得たりといった表情で話を続けた。

「分かつて貰えたらいいね。そう。このままでは責任がルカにいつてしまう。それを避けたいんだ」

そうなのだ。

最初のピアスショップ襲撃は彼女の指図だったし、その実行犯にそのままクラブを襲わせている以上、警察の捜査が彼女の元へ及ぶのは時間の問題だ。

また、そのことが明るみに出ると、今までの彼女の係わった事件についても暴露されてしまう危険性がある。そうなれば、問題は彼女だけでは済まない。彼女の所属事務所や会長にも捜査の手は及ぶだろう。私がそう仕向けたのだから間違いは無い。事件の発端となった彼女がどうなるか……考えるまでも無い。

私は彼女が欲しかった。

でも手に入れることは出来なかった。

だからといって、彼女の破滅を願う気持ちは……今は無い。

「君の意識が戻ったと聞いて、そろそろ警察がやってくる頃だ。君が、もしまだルカのことを愛しているのなら、是非お願いしたい」

店長は頭を下げた。

私は彼の店を破壊した。元々はお嬢様の命令だったとはいえ、私は実行犯だ。恨まれても仕方が無い。

そんな私に頭を下げている。

私が愛したお嬢様のために。

「一つ、聞いていいですか？」

私は彼に聞いた。

「なんだい？」

「お嬢様の右肩の蝶を施術したのはあなたですか？」

「……そうだよ」

神妙な面持ちで答える店長。

「何故？」

「リンちゃんとレン君の二人の絆は強かった。でもルカも同じくらい、いやそれ以上にリンちゃんを愛していることが分かったからさ」

「あの二人が別れないと分かった上で、どうしてそんなことをしたんです？」

「彼女に頼まれたからさ。リンちゃんだけでなく、マネージャーの自分にも同じようなタトウが入っていたら、そのマイナスイメージは少しは緩和されると彼女は言っていた。リンちゃんがタトウを入れた本当の気持ちを知りたいともね。それだけ彼女はリンちゃんに対して必死だったんだ。仕事としても、恋愛としてもだ。そんな彼女をどうして止めることが出来る？」

そうか。やっぱりな。

「ふっ……」

笑いが零れた。

分かっていたこととはいえ、他の人間から聞かされると殊更堪える。

最初から私には勝ち目は無かったということだ。

「はははは……」

自分の声とは思えないような乾いた笑いが、病室にこだまする。

笑いながら、私の目からは涙が溢れていた。

「あははははは……」

とんだ道化だ。

笑いが止まらない。

私は今まで一体何をしてきたのだろう。

店長は、狂ったように笑い続ける私を寂しげな表情で見ながら、

真面目な顔をして言った。

「今、ル力を救えるのは君しかない。頼む」

「好きな女性一人守れず、とち狂って手をかけるような私に、そんな大それた事が出来ると思っているのですか？」

ひとしきり笑った後で、私は店長に聞き返した。

「君なら出来るさ。君は強い。そして君は……まだル力を愛している」

「お見通しなんです」

「まあね。こんな業界に長くいるから、人を見る目だけは備わってしまうんだよ」

私に向かって爽やかな笑顔を向けている店長。

目を閉じる。

色々な場面が走馬灯のように過ぎる。

そのどの場面でも彼女は笑っていた。

私は決断した。

目を開ける。

「お嬢様に伝えてください」

私は最後に、彼に言葉を託した。

「なんだい？」

「幸せになつて下さい……と」

万感の想いを込めて、そう伝えた。

「わかった。必ず伝える」

きつと私の想いは伝わったのだろう。それだけ言って、店長は部屋を出た。

彼が病室を出ると、途端に静かになった。

その静寂の中、真つ白い天井を見上げる。

あれだけ荒れ狂っていた凶悪な想いがすっかり浄化されてしまつて、今ではとても心静かに落ち着いていた。

やがて、廊下から慌しい足音が聞こえてきた。何か叫ぶような大声も聞こえる。このデリカシーの無さは警察かな。ここは病院だ。

もう少し静かにして貰いたいものだな。

「さあ、これからが本番だ」

私は心を決めた。声に出して誓う。

私はこれから、あの人を守るために戦うのだ。

あの人を守るために戦う。

何という栄誉。

その最高の誇りを胸に、これからを生きていく。きつと、もう二度と会えないだろう。会ってはいけないのだ。でも。

私があの人を守るのだ。

私が愛したあの人を。

決して振り返ることは無いあの人を。

私がこの手で。

この身体で。

全身全霊をかけて。

守る。

この世の全てから。

あの人に害を為す全てのものから。守る。

あなたの笑顔を。
守る。

さようなら。私が愛したあなた。
あなたが忘れても、私は絶対に忘れない。
ずっとずっと愛しています。

今までも。

これからも。

さようなら。巡音ルカ。私の愛した人。

さようなら。

さようなら……。

エピソード3 アンコール

アンコールが終わって俺たちが舞台から降りると、舞台袖に待機していたのか、マネージャーがすぐさまやってきた。

「お疲れ様。はい、タオル」

俺とリンに渡される。

「何か、飲む？」

俺たち二人に聞いてくる。

「うん。いつものやつ、あるかな？」

俺が聞くと

「あるわよ。はい、これ」

そう言って、俺が『いつもの』と呼んでいるスポーツドリンクを差し出してくれた。

「ありがとう」

「リンは？ いらないの？」

俺の返事に適当に相槌を返しながら、マネージャーが今度は俺の隣にいるリンに訊ねた。

「私もいつものがいい。ある？」

「もちろん」

心なしか、俺に対した時より優しげに微笑みながら、マネージャーはリンの『いつもの』を差し出す。100%オレンジジュース。リンはいつも決まってこれだ。

「今日も良かったわよ。でも、レン君？ ちょっと音を外しすぎね。気をつけないと」

厳しい『いつもの』チェックが入った。さすが、元売れっ子ボーカーリストは言うことが違う。そんじょそこのサラリーマン・マネージャーとは、やっぱり違うな。

「さっすが、ルカ！ レンが外したところが分かるんだ！」

「バカにしてもらっちゃ困るわね。それでも昔はあなたたちよりも

売れてたのよ？」

リンの感嘆の声にすかさず抗議をするルカ。口調は厳しいが、でもその表情は変わらず優しい。

あの事件の後、ルカは事務所を辞めた。責任を取って、リンのマナージャーを降りたのだ。

ピアスシヨップとクラブの襲撃、そして過去の一連の鏡音リンに関するトラブルについては、その一切の責任をカムイが引き受けた。彼は頑として自分の単独犯行だと言い張った。上司であるルカには何の相談もしていない、と。

警察側も色々と手を尽くしたのだろうが、結局それ以上の証拠を揃えることが出来なかったのだらう。ルカは告訴を免れた。

しかし、ルカ自身が納得をしていなかった。

何より、リン本人が関与していないとはいえず、これだけの騒動だ。今まで苦勞して培ってきたリンの印象が悪化することは防ぎようが無い。マナージャーという職業柄から『部下が……』という言葉だけで幕が引けようはずも無い。

それを、ルカは自身が身を引くことで決着を付けた。

おかげでリンには何のダメージも無かった。むしろ『悪徳事務所』に振り回された悲劇の歌姫』という扱いになってしまい、逆に今まで以上に注目されるようになった。もしここまでルカが狙っていたのだとすれば、これはもうさすがというしかない。

ルカはリンの元を去った。

俺の目からすれば、それは清々しいほどの潔さだった。

でもリンはそれを許さなかった。

リンは、今回の事件を口実に所属事務所を辞め、独立した。

そして……引退したルカを自身のマナージャーとして呼び寄せたのだった。

もちろん、こんなことリンが一人で考えつく筈が無い。店長の入れ知恵だ。

最初は渋っていたルカだったが、リンの想いが通じたのだらう。

最後は引き受けてくれた。

やはりルカは凄い。あつという間に体裁を整え、リンには大したダメージも無いままに独立を成功させた。しばらくして独立事務所の経営も安定してきた時に、俺が呼ばれた。

俺はリンと同じ事務所から、念願だったデビューを果たすことになった。

そして今。

俺はリンと同じステージに立っている。

「さあ、ホテルへ戻りましょう。熱いシャワーでも浴びて汗を流したら、食事に行きますよ」

「はい！」

まるで引率の先生のように、ルカが言った。

控え室に戻り、手早く衣装を着替える。まだまだ小さい事務所なので、スタッフもそう多くない。着替えを手伝うスタッフなんかいない。

「あ、レン？ 背中 của ファスナー下ろしてくれる？」

控え室はリンと共同。年頃の若い男女が同じ控え室だなんて、他の事務所の人間が見たら目を見張る光景だろう。

「はいはい、お姫様。大体自分一人で着られない衣装なんか、どうやって着たんだよ？」

「着る時はルカが手伝ってくれるんだけど、何故か脱ぐ時は手伝ってくれないのよね」

どうやら脱ぐ時は俺の出番らしい。信用されているのか、試されているのか。どうにも居心地が悪いよな。ルカ、意地が悪いぜ？

俺はこちらに背中を向けたリンを後ろから抱き締めた。

「何よ？」

不意に抱かれて戸惑ったのか、不満そうな声を発するリン。

「いや、幸せだなんて思ってたさ」

「なんだ、そんな事？」

「なんだじゃないよ。ちょっと前まで、俺は絶望していたんだから」

「そうね……。私も同じよ」
肩に廻した俺の腕を抱き締めながらリンが答える。
ふと。

俺の腕の中で、リンが振り返った。目を閉じる。俺も目を閉じた。
くちびるを重ねる。求める。貪る。絡める。吸う。そして……。感
じる。

「レン……大好き……」

「俺もさ。リン」

甘いひと時が控え室に流れる。

「今夜、店長とメイコさんが来ていたね」

俺の腕の中でリンが言った。

「気がついた？」

「もちろん。あんな最前列にいたら直ぐに分かつちゃうよ」

「あの二人には、今日のステージはどう見えたかな」

「ダメ出し食らうんじゃない？ レン、今日は酷かったよ？」

「そうかな……。上手く誤魔化したと思ったんだけどな」

そうなのだ。

目の前に店長とメイコさんがいるかと思うと、どうにもやり難く
て、簡単なミスを連発してしまった。

「店長もメイコさんも音楽には煩いわよ？ 絶対に怒られると思う
な」

「ひえええっ！ 勘弁だよ」

俺はリンから身体を離して、ふざけて大袈裟に怯えた。

その姿を見てリンが笑う。

その肩にいる紫の蝶。

「そういえば……」

「何？」

「最近、メイコさんがタトゥーを入れたって聞いたけど、知ってる
？」

「もちろん知っているわよ」

「何の図案だろう?」

「蝶よ。紫の蝶」

「えっ?」

「右肩に」

「えええっ?」

「店長も入れたんだって。お揃いでね」

「えええええっ?」

俺は心底驚いた。

あんなにメイコさんにタトウーを入れるのを嫌がっていた店長が? しかもメイコさんとお揃い?

「二人の絆の証なんだってさ」

悪戯っぽく俺を覗き込むリン。その瞳がキラキラしている。

「あの二人、結婚するらしいよ? お互いの蝶の羽根の中にお互いの名前が隠してあるんだって」

うわ……。店長、遂にやったか……。自分の事を『ヘタレ』だとか言ってたけれど、とうとう覚悟が出来たんだな。

「っていうか、メイコさんが押し切っちゃったみたいね。店長、女性には優しいから。特にメイコさんにはね」

微笑みながらそう言うリン。どこか羨ましそうな雰囲気だ。

「ねえ。私たちはどうなのよ?」

「えっ?」

甘えた口ぶりで俺に話しかけるリン。ちらりとこちらを流し見たその視線が熱い。

「もうずっと前から一緒にいる誓いとして、お揃いのタトウーを入れてるわ」

「だから?」

「んもう! バカ! 鈍いわね!」

リンはぶいっとそっぽを向いた。

怒られてしまった。

何をそんなに怒っているんだろう?

「こらあつ！ 何遊んでいるのよ？ タクシー待たせてるんだから、早くしなさいっ！」

控え室の扉が激しくノックされて、外からルカの怒った声が聞こえてきた。

ヤベ。あれはマジで怒っている。

ルカは怒らせると怖いんだ。

「ちよつと、レン？ 早くファスナー下ろしてよ！」

俺は慌てて自分の着替えをし始めた。リンは放っておいたので、未だ衣装のままだ。

「俺が着替えたら下ろしてやるよ。どうせ脱ぐ時には俺がいちゃマズイだろ？」

「だったら早く着替えなさい！ ルカ、怒ってるじゃないの！」

「まだなの？ 今日店長やメイコ姉さんが一緒なんだから、遅刻しちゃ失礼でしょ！」

外から再び大声が聞こえる。だんだん声のトーンが上がっている気がするな。そろそろ爆発しそうな勢いだ。

「はいはい！」

大急ぎで着替え終わると、衣装を無理矢理自分の鞆の中に詰め込む。そしてリンの傍へ駆け寄った。

背中ファスナーを下ろす。

一瞬、このまま押し倒してやりたい衝動に駆られたのはヒミツだ。「じゃあな！」

「ああっ！ ちよつと待つてよお！ 私の方が衣装が嵩張るんだから、バッグに詰めるの、手伝つてよお！」

「知らないよ。さっき鈍いとか言ったお返しさ」

「バカ！ レンのバカあつ！」

リンを置いてさっさと控え室を出た。
外には。

怒りに震えるルカがいた。

「このバカレン！ リンの方が衣装も何も多いのに、一人にしてち

やダメでしょうがっ！ さっさと中に入って手伝ってきなさい！」
正に鬼の形相で俺を叱り飛ばすルカ。

「でもいいこと？ 手を出したら承知しないわよ？」

一瞬、全てが凍てつくような冷たい響きの恐怖がその場を支配した。

こんな時のルカには誰も逆らえない。

俺は慌てて控え室に逃げ込んだ。

扉を閉めて、ふと前を見る。そこにいるのは……。

衣装を脱いで下着姿になったリン。

衣装の都合なのか、部屋の中に一人だけという気安さからなのか、その薄い胸にあるはずのブラジャーがない。白いショーツ一枚のあられもない姿のまま、凍りついたようにこちらを見ていた。

その右肩に、紫の蝶。

俺と同じ、紫の蝶。

幸せを運ぶ、紫の蝶。

一瞬の沈黙の後。

「きゃああああああああああっっっ！」

リンの絶叫が辺りに響き渡った。

それはもう見事に響き渡った。

その後の俺がどうなったか。

わざわざ語る必要もないだろう。

俺の片羽根の折れた右肩の蝶は、俺のそんな無様な姿を横目に見ながら、いつものように微笑んでいた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4578j/>

右肩の蝶

2010年10月8日10時36分発行